女鑑

明治三十二年十二月五日發兌

第貳百拾八號

國光社

女鑑第貳百拾八號

目録

定價
一册　金拾錢
六册三ヶ月分　金五拾五錢
十二册半年分　金壹圓
全國無遞送料

明治三十三年十二月四日印刷
明治三十三年十二月五日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛
印刷人　東京市京橋區南八町堀二丁目十番地　並木良雄
發行所　國光社
發賣元　靜思館

稟告

從來本誌の發賣に係る事務は國光社雜誌部に於て取扱ひ居候處向後東京市京橋區南傳馬町壹丁目七番地靜思館に於て取扱ひ候事に致候間自今國光及女鑑に關する御照會、御送金、御通知等は總て必靜思館宛にて御發信被成下度候也

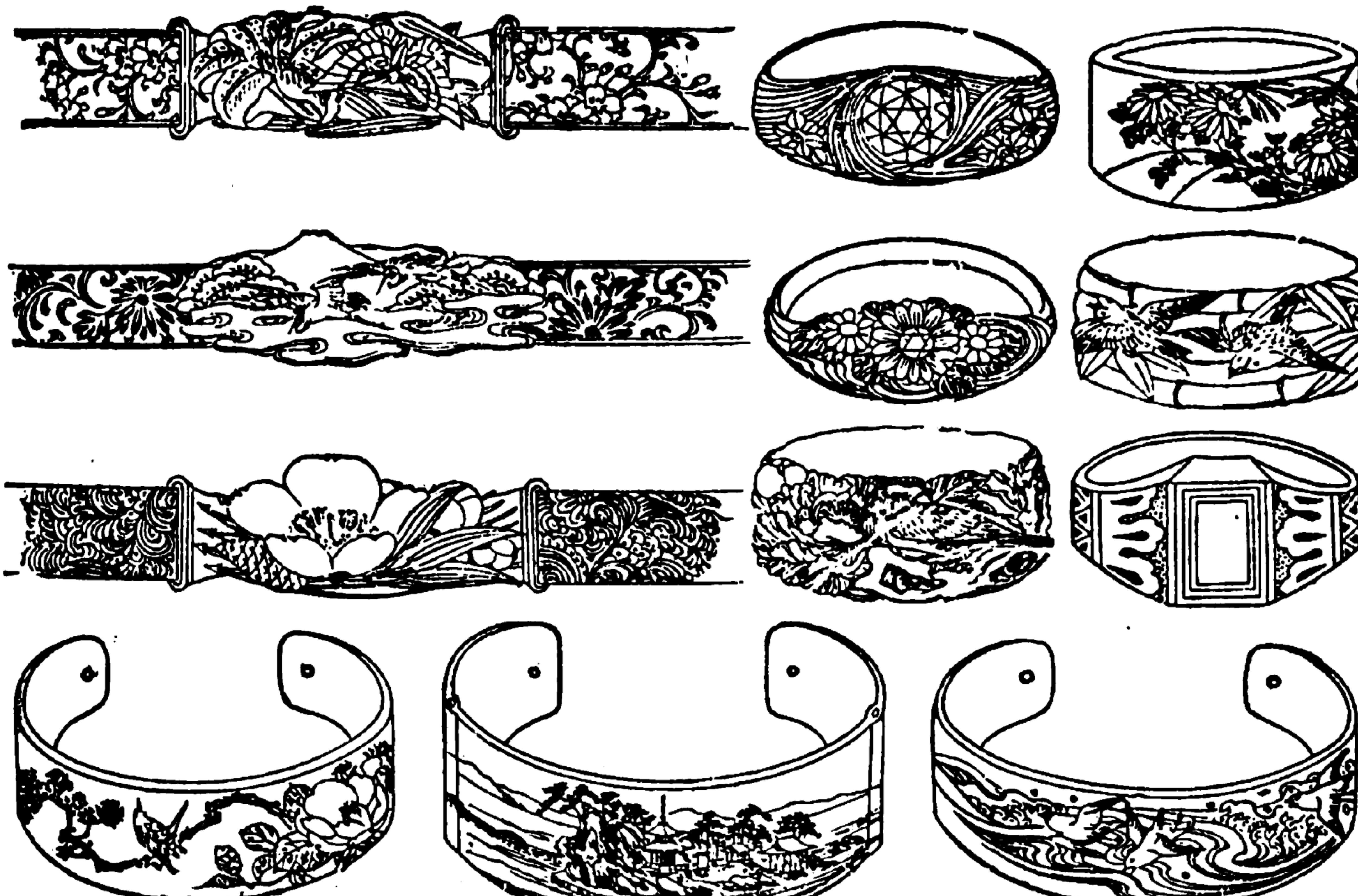
追て編輯に關する件は從來の通り國光社編輯部宛にて御發信被成下度候

明治三十三年十月

東京京橋區築地二丁目廿一番地
國光社編輯部

東京京橋區南傳馬町一丁目七番地
靜思館
（電話本局千三百七番）

吉沼製作品



金製指環

●十八金二匁五分付片切彫刻付
甲價 十六圓
乙價 十四圓

●廿金三匁付平象嵌片切彫刻付
甲價 廿二圓
乙價 十九圓

●廿金三匁付薄肉彫刻付
甲價 廿六圓
乙價 廿三圓

●廿二金三匁五分薄肉象嵌彫刻
甲價 卅四圓
乙價 廿九圓

●廿二金三匁五分厚肉彫刻
甲價 卅六圓
乙價 卅一圓

●廿二金三匁五分厚象嵌彫刻
甲價 卅八圓
乙價 卅三圓

●廿二金三匁五分肉彫象嵌ダイヤモンド入
甲價 二百五十圓
乙價 百八十圓
丙價 百三十圓
丁價 九十圓
戊價 六十五圓
巳價 五十圓

●廿金三匁付角小判形無地印面指環
十五圓七十錢

●廿二金四匁付角小判形無地印面指環
〃 廿二圓四十錢

●純金九匁付角小判形無地印面指環
廿九圓五十錢
外ニ段付模樣付形狀ノ難易ニ依リ價格ニ差アリ

金製帶止

●十八金製高彫繡珍綾織紐付
甲價 卅五圓
乙價 三十一圓
丙價 廿七圓
丁價 廿三圓
戊價 十九圓
巳價 十六圓

金製根掛

●十八金一匁五分付片切彫刻
甲價 十一圓
乙價 九圓三十錢

●廿金二匁付片切彫刻
甲價 十四圓五十錢
乙價 十二圓五十錢

●廿二金二匁五分片切彫刻
甲價 十九圓
乙價 十七圓

●十八金三匁付蝶番付三ツ折片切彫刻
甲價 廿圓
乙價 十七圓五十錢

●廿金三匁付蝶番付三ツ折平象嵌片彫刻付
甲價 廿三圓
乙價 廿圓

◎印材製作篆刻
應貴囑

右の外金屬の多少寶石の大小又は彫刻の繁簡精粗により代價に高低の品々あり

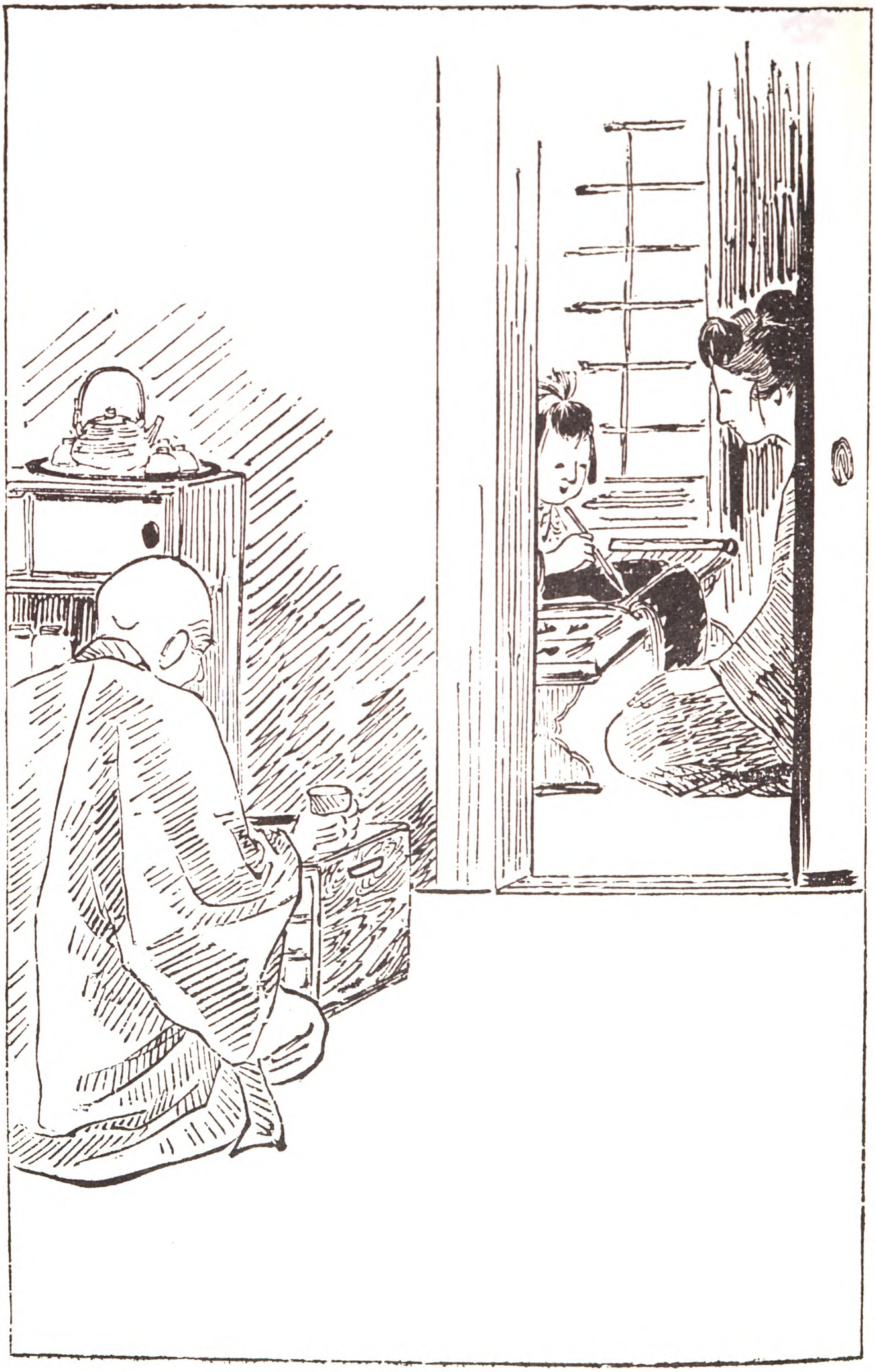
時計及寶玉類貴金屬美術品商

東京市日本橋區通り二丁目

吉沼又右衛門

電話本局三十三番
長距離電話接續

孝女さよ女

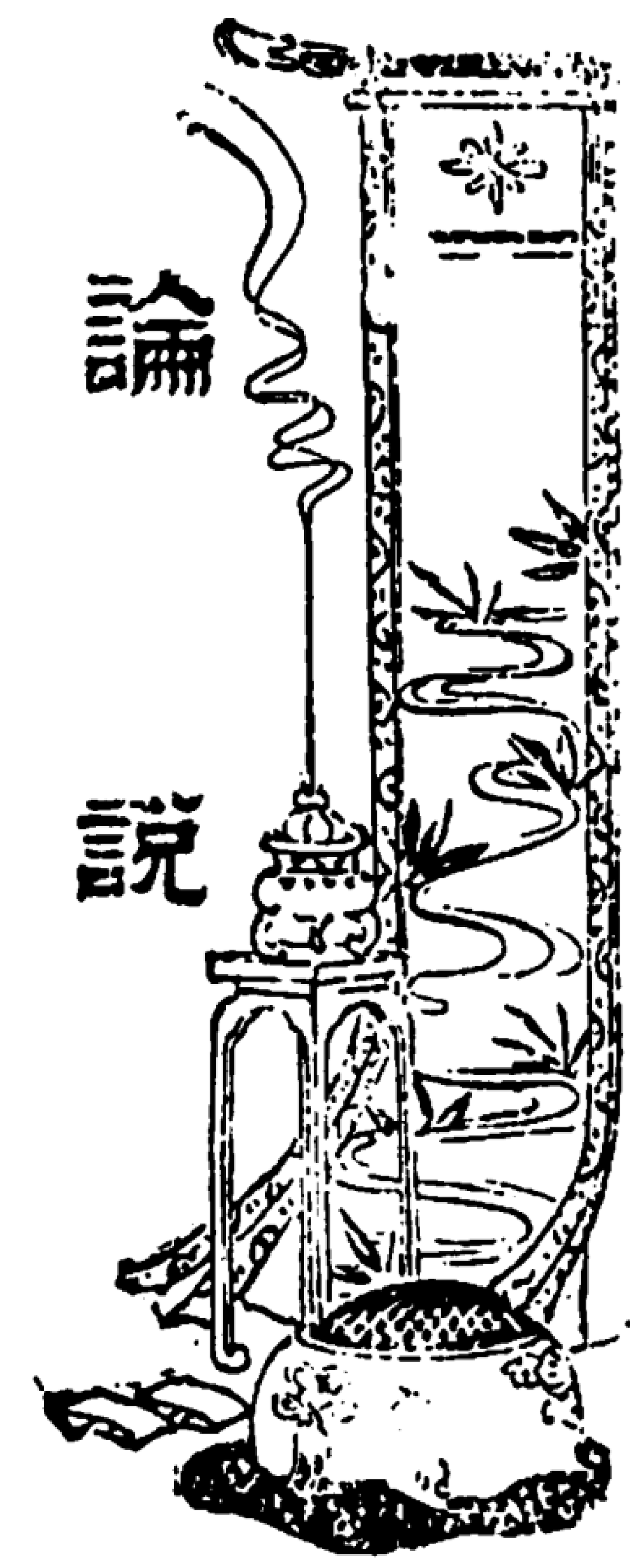


その子を觀よ

人を人たらしむるに於いて、家庭教育の輕ずべからざるは、屢々之を言へり。今いさゝか之を補ふ所あらむとするにあたりて、先づ口にすべきは、母がその子を知る事なり。人の子に父母として、その兒子を養育するに當り、之をして賢良なるものたらしめむと思はざるは尠し。然るに世間は、未だ必ずしも、賢良なる子弟を以て充たされず、否、却りて肝惡なる少年の横行するもの多きを知る。是、かつてもいへるが如く、家庭教育の宜しきを得ざるに由るや、疑ふを要せずと雖ども、更に遡りて、かくも家庭教育の宜しきを得ざるに至りし所以を熟考すれば、父母、殊には常に内に至りて、その兒子の性状を看取するを得べき母が、その兒子の天性如何を觀るに誤る所あるに由らずむばあらず。兒子の天稟に或長處あることをば、看過して、その短處をのみ責めむか、兒子の他に思ふ所ある心を以つ

てするも、內自ら平ならざるを感じ、不知不識の間、偏性のものとならむ。かゝる觀察を爲すは、他人の同情を以つてしては、如何に最高度の同情たりといふと雖ども、能くその効を奏することなし。たゞその生父母の至誠を以つてするをこれ專一となす。これ、彼の敎育家が、父母の兩者、若しくはその一者を缺ける兒子は、之を併せ有するものゝ、智德圓滿に發達し易きに比すべからずとなす所以なり。父母若しこの觀察に心を須ゐざらむか、はた何人の手腕を待ち、また何の日を期してか、その兒子の圓滿なる發達を希ふべき。この事之を兒子の惡路に走らざるを思ふときに於いてのみにはあらず、兒子の事業を成し、志を遂げしむるを謀るに於いて、亦、大に留意するを要するなり。兒子を放任して、全く之を監督敎誡することなからむは不可なりと雖ども、また嚴しく之を拘束して、その發すべき花をして咲かしめず、その長すべき技をして長ぜしめざるが如きは、決して嘉すべからず、否、之を小にしては、その家のために、之を大にしては、その國家社會のために、輕々に視るべからざるの罪惡たり。法規之を罰すといへども、罪たるや明なり。聖人は必ず之を責めむ。人生もと天賦あり。學むで到るべきも

才あり、學ばずして到る才あり、學ぶも到らざる才あり、また一に不能ありといふとも、他には全能なることあり。之を概括して、一樣ならむを責めむは、責めらるゝもの寃ありて、責むるもの罪あり。蔓草地に匐ふこと數間、松杉天に朝する數十尺、之を横へて地に伏せしむれば枯死せん。彼を直立せしめて、能くその生を完うすべきか。植物に生靈なし。而かも天與の資を以つて發育し、些少の妨害も亦之をして仆れしむ。人は萬物の靈といふに非ずや。その所長を萎縮せしめられて、その短所に鞭たる。心あるもの焉ぞ能く堪へんや。何ぞ憤らざらむや。その兒子を窮せしめて。而して之に亂せざるを責むといふか。何ぞ父母の情なき。その長を認めずして、その短をこれ嘲るとせむか、父母の慈愛何處にかある。當代の青少年、事を完ふするもの尠し。その因多くは、父母の望む所の酷なるに存じ、父母の望む所のその當を失せるは、父母のその兒子を觀るに誤るに出づ。夫たり父たるものは、概ね外に在りとせば、妻たり母たるものゝ、常に家に在るべきもの、焉ぞ、心を忽にすべけむや。



女品論（地）

三輪田眞佐子

人は、その位置の高下、氣象の强弱、及び、性質の良否など、一切、精神上の現象は、外部の表出に由りて知らるゝものぞかし。この表出を稱して人品といふなり。されば、初めて面會する人にても、その人品を見て、略、その位置氣象及び性質とを推測することと難からじ。これおのれの人品論をものする所以なり。

表出の主なるものは、擧動となりて現はるべし、すなはち、擧動に由りて、高慢なる人なるか、卑屈なる人なるか、陰險なる人なるか、或は、浮薄なる人物なるか、柔弱なる人物なるか、若しくは、澹泊なる氣質とか、區々たる氣質とかなど、一切の人品を卜知するに足らん。

なべて、人は、人類より以下の動物、亦は、植物につきても、彼等を人類視して、上下の品別を附するものなり。たとへば、夜半に鶴聲を聞きて、忽ち、そは、子をおもうてや鳴くらんと推量し、雪中の松柏を見て、直に、そは、操を重んずるならんと想像するがごとし。されど、われらは、鶴にあらざれば、鶴の何故に鳴くかを知る能はず、松柏心なきを以つて、操の何物たるを知らざるべし。されど、人は、胸中貴き理想を作るを以て、これに適するものを人類視して同情を表するなり。されば、人に接するときに當りても、なほさら、外貌を見て、直に、品評するものにあら

ず。その人品如何を認めて、その精神上の狀態を察して、後、初めて、尊信するか、輕侮するかを決するものならん。されど、人は、男女を問はず、精神の修養をつとめざるべからず。精神美なれば、これが表出して人品高雅なるべし。高雅は、以つて美醜の根底となるべし。

そもそも、外貌を改作せんとするは、天に登らんがごとく難く、人品を高尚にするは、毛をやくがごとく易し。故に、女子たるものは、外貌に心を用ゐずして、人品に意を注ぐべし。外貌は、先天的の美醜なれば如何ともすること能はざるも、人品は、後天的の美醜なれば、美となるも、醜となるも、自ら撰ぶを得るなり。されば、人品上の美人たるは、なにか難からん。

擧動は、威ありて猛からず、柔和なれども能く活潑にして、以つて、女子生れながらの天眞なるべし。故に、わざと、首を振り頸を伸し體を屈する如きは、醜の甚しきものなれば、疾く改むべし。唯、姿勢を正しくし、胸部を張り、自然の擧動を有ち、悠々として迫るところなく、而かも、高慢の景色を含まず、一言にてこれを言はゞ、女性自然のまゝなる擧動こそ美くしけれ。

歩みかたも、これまで、女子は、内足を尊びき。されど、極端に内足に過ぐるは、大人の風を傷ふ觀なれば、故ら、幼よりかゝる習性をつくるは、益なくして害あり。されど、餘り外足に過ぐる如きは、男子めきたる觀あるを以て、適當なる習慣を作るべし。亦、着眼點の如何と、注視の風體とは、人品に影響すること大なるを以て、大に心すべし。即ち、眼はつねに前方を見て、餘り、上若しくは下に過ぐべからず。なほ、斜視の習慣を醜しとなす。

理想の嫁（三）

欣　翁

さても、世間は廣いものでござる。先頃女鑑の誌上で、一寸、自分かたへ迎へる嫁の個條書を述べて置いたところが、先づ、緣者の家內が見えられての噂を初として、續々方々から相談がある、知合からの申込もあれど、又、自分の友だちで、斯樣々々との名義で申越さるゝ書面も幾通となく受取つたでござる。此の節、新聞の廣告で、求妻とか求婚とかいふ文字をよく見るけれど、まさか、それに申込を爲る者もあるまいと思うたのは中々の間違で、世間には、隨分と嫁入頃の人も多いことと見えまするなう。昨日も、椽側で背を晒しながら、數日來受取つた書面を繰廣げて讀んで見たが、近頃の姫御前といふものは、誰も〳〵、いかう國文とやらいふものが達者にお出來なされて、むづかしさうな語が澤山に遣つてあつて、なるほど、學者の文章らしくは見えるけれど、女子の文章とは受取りにくい。その上語格とやら語尾とやらいふものが正しいのか知らんが、是迄用ゐ來りの敬語なども、とんと省いてあるものだから、自分のやうな天保人間には、てんに生意氣に聞えて、二三行讀むだばかりで、すぐといやになる。斯樣の書きざまでは、敎員の撿定試驗には、及第が出來もしやうが、嫁の試驗には丸々落第でござる。（惡口ではない、これが今時の實際であるかとよく〳〵歎息致すことでござる）

今朝近處の懇意な老人が見えられて、此の書物は、自分の所に茶の稽古に來る、若い婦人の作られたもの。讀んで見よというて一冊置いて行かれた。跡で取上げて見れば「女子のつとめ」といふ表題

で、隨分紙數もあるから未だ通讀はせぬが、所々見た所では、中々感心なことが書いてある。……

……これが婦人の著書、しかも年若の娘御の作であるから、猶更面白い。………

女子の幸福ある生活………といふ條のところには、女子が、獨身で立てるといふのは何處から云ても自然に戻つて居るものである。ドウシテモ他に嫁ぐといふが肝要なことで、眞正なる幸福は、圓滿な家庭の主となつた婦人の身に存するものである。………さて、その嫁といふものゝ資格に就いては、學者であるといふことは、たんと價値は無い。あまり學問が出來過ぎると、今時は、眞似目な人は嫁には貰はないと書いである。………それから嫁に行くのに姑を扼介がる者があるが、姑があればこそ小供が出來てからも、ほんとうの家庭が造れるといふもの。姑の機嫌が取りされぬやうな者は、夫の氣に入ることも出來ぬ筈。つまり據無に一家を、かつ／＼立てるもので、それでは、何の樂もないことになると書いてある。……

何處も／＼感心なことばかりである、その末章の「當世女子敎育の欠點」といふところに、斯やうなことがいうてある。

當今の女學校は、學科は中々高尚で、修身なぞ隨分高尚な講釋を聞くけれども、嫁入して後の大切な務向に就いての素養を欠いで居るから、まことに困る。第一、舅姑に對しての心得、日々の仕へ方なぞ一向に敎へてないから、敎へはしても、之に習はせて無いから、それが大欠點である。西洋なら、父子別居論もよからうが、我が國の今日には決してさやうな突飛な議論は、實行が出來ない。………第二には、妻た

るものが、夫に對しての責任といふことに就いての考が與られて居らぬ。そこで、嫁たるものは、お客にでも行つたやうな、それでなくとも、夫にすがり氣になつて居つて、自分の本分を盡さうといふ心得が立ちて居らぬであるから、姑や夫の氣を慰めるといふ大切な務が、一向に出來ぬ。却つて、外から自分の機嫌を取つてもらひたい位に考へて居るのが多い。………女子が、家庭和樂の中心となるといふ以上は、實際に、その和氣靄々の源泉となるべき高尚温和なる精神を供へて居らなければならぬが、學校では、その邊の修養をさせることが全然缺けて居る。………

といふやうなことが書いてある。………何でも、若い娘の人の書いたものとしては感心な言ひ方である。實に、拙者感心致した。斯様なのが嫁に貰へたら、嘸仕合なことであらう。………なう、ばゞや。………何でも彼處の家へは、毎々出入されると聞いたから、兎に角一度他處ながら本人を見て、一言でも話を聞いて見たいものと思うでござるテ。………

養蜂業と蜂蜜（二）

近藤隆

蜜蜂は、六足蟲の一にして、彼の蝶や蛾と同じく、變態を爲して發育し、其の成蟲のみは、產卵するも、直ちに死せずして、數年の間生存し、巣を營みて、多數相集り、共同の生活を爲し、其の組織せる社會は、秩序あるものにして、三階級あり、第一女王と稱へ、其の社會に於て支配の權を有するか如き大なる雌蜂あり。其の他に職蜂雄蜂など

いり、余は詳しき蜜蜂の生理を述ぶることを止めて、其の飼養の如何なるものあるかを説くべし。夫蜜蜂飼養の事たる、其の手續き、甚だ簡單にして、他の諸事業の如く、資本と多額を要するにもあらず、取扱の難きあるにもあらず、只夫れの資本と稱すべきものは、蜜蜂飼養器にして、其の外に蜂群あらば足れり、而して蜂蜜製造の事は、蜜蜂自身等の仕事にして、遠く花蜜を求むるも、近く花圃に至るも、凡て彼等の思ふが儘なり。蜜蜂は、多くの花の間に轉移して、其の度に生ぜる花蜜を集取して、之を、其の巣中に齎し、以て蜂蜜を作る。されば、蜜蜂なければ、風雨の爲めに、徒らに癈物に歸すべき花蜂も、彼等の勞力によりて、終には、少からざる額の國富をば形來するなれ。豈に、此の間の成行こそ兒童の示物教育に資する、尤も大なるものに非ずや。我、日本の如きは、花の數多く、殊に榮種の花の如き、其の眞盛りには、如何許りの大なる花蜜のたかが生ぜらるるよ。然かも、我が國に於ては、養蜂の業の、甚だ微々として振はず、其の函數は、漸く七萬なる少數にして、其の產出する蜜の量も、廿萬斤と云ふに非ずや、且つ、其の蜜の質もあしく、之を改良する時は、三十萬圓にも及ぶべきに、今日にては、漸く、其の數分の一に當ると云へり。之を英吉利邊の者に比すれば、彼の國にては、四五百萬斤の蜂蜜を產し、從て、一斤の巣箱より多分の量を產出する譯なり、亞米利加にては、其の一个の巣函より產出する量は、廿五六斤に達し、殊に太平洋沿岸地に於ては、一層大にして、其の格段なる塲合には、六十斤より、百斤に及ぶと、余は、此等の事實を聞く每に、我國に於ても、何卒斯の如くあれかしと望むものなり。然れども、彼の亞

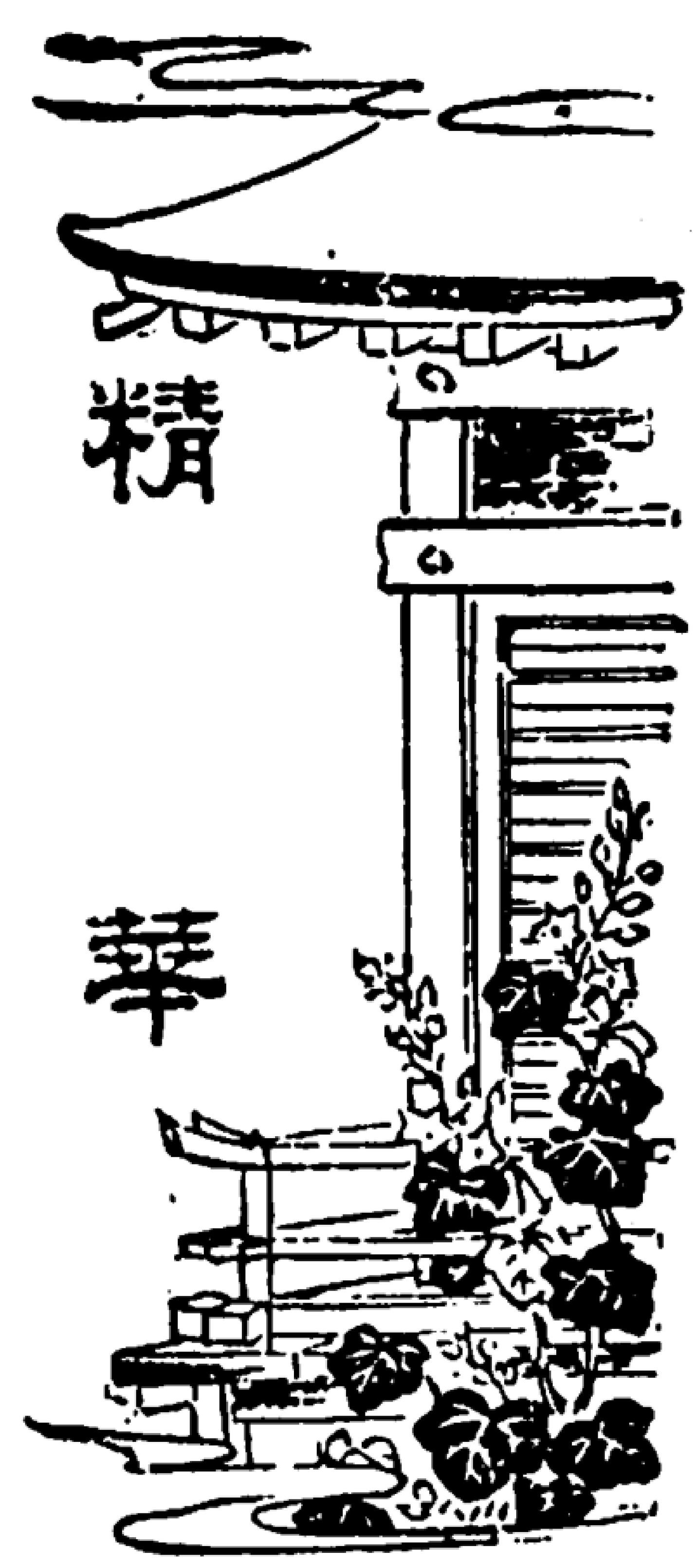
米利加に於てすらも、今より三四十年以前には、今日の日本の如く、養蜂事業は甚だ幼稚にして、微々振はざりし者が、東より西に、南より北に轉轉運搬されて、遂に今日の盛域に達したるを思ひ又英國の如きも、漸く二三十年以來にして、斯く盛大とはなれる事を考ふる時は、未だ容易に斷念するものにあらず、只我が國は、夏季雨多く、蜜蜂の尤も、忌む雨や風は、花の開ける時と、僅かの間を隔つるのみにして、盛に襲ひ來るものあれば、此のみは、如何乎と危みしも、斯の道の專問家によれば、未だ俄に、絶望するにも及ばずとの事なれば、斯に一應の事柄を述べ、若し能ふべくんば、養鷄養蜂の事業の如き、尤も家庭の趣味ある作業に屬し、且つ、經濟的にして、自然を樂むなど云ふ如き面白き又た、効果充分あるもの丶、一般家庭のうちに、其の母たる女子によりて、輸入されんことを希望して止まざるものあり。

養蜂の細かき手續きは、夫れ〴〵の折を以て、記述するを得べし、今は、只だ少しく養蜂の由來に就て、述んに、我が朝にては、皇極天皇の二年百濟の太子餘豊蜜蜂の房四枚を以て、大和の三輪山に放ち養ひせしことに始まれり。其の後千數百年、或は、天然に巣を營み、或は、人に飼はれ、以て今日に及べるも、前述の如く、此らの進歩せる飼養法の應用さる丶にもあらず、空しく舊觀を呈するも、今や益々文明の域に進み、泰西の我が知識は、凡ての事柄の上に應用され、依て斯業も近き未來に於て進歩發達を見るを得べしと信ず、古昔學術の未だ開けざる時に當てや、花粉の交換などの事を知らず、彼の蜜蜂の轉々して、花上に移るものあれば、或は以て結實に害ありなど唱へたる位ありき。今日に於ては、斯かる異說を唱ふるも

のなく、容易に草函を設け、蜂蜜を採集するを得べし。或地方にては、山林原野多く、花卉多きを以て、三四十箱の蜜蜂を飼養するは易々たりとにして都會の地に於ても、一二箱の設置をするが如き、又た同様なるのみ。夫れ如斯しと雖、其の飼養方法は、誠に入り難きものなり。世人は、學易きに氣付かずして、其の困難らしと云ふに注意せり。此の業たる、彼の養經の如く、大なる地積を要するにもあらず、飼食を給するの要もなく、又養蠶の如く除沙分泊の面倒もなし。古來天虫靈虫など唱へ、其の飼養方法の如き、人爲の左右し能はざる處にして、若し家に一旦凶事あれば、蜜蜂は、擧つて、其の巣を離て遠く去るものなりなど種々に恐怖せるは、畢竟迷信の然らしめしのみ。外國にありては、已に紀元前アリストテレスの之が飼養に關する說述あり。其の他學者の彼此說明

する處なきに非ざるか、其の盛大となれるは、近く三四十年來の事なり。





勅語要義（承前）

東久世通禧謹述

謹みて案ずるに、國憲は、專、帝國憲法を指し國法は、法律勅令等を指させ給へるものなり。此等皆、陛下が、皇祖皇宗の御遺訓に基き、國家を經理し、臣民の安寧を謀らせ給ふ所以の綱紀なり。夫、國法は、臣民の安寧幸福を保護せらるゝ成典にして、之なくば、人々、放恣暴横にして、各、其の堵に安んずること能はざらん。國法は、實に、國家治平の經緯、亦、神聖にして犯すべからざるものなり。

而して、この國法は、其の國體に基き、國情に準據して、制定せられたるものなれば、其の意義は、各國、皆、主とする所を異にす。人民ありて、而る後に、君主ありたる邦國に在りては國法は、人民相互の約束によりて、之を規定し、君主は、之を執り行ふに過ぎざるが如し。又、君主專制の國にありても、國法の精神は、唯、國民の安寧を保護するのみの意義たるなり。然るに、我が朝、皇室ありて、而る後に、此の臣民あり而して、國法は、即、此の國體に準據し、皆、皇祖皇宗の遺訓を恢弘せさせ給ふ精神に基かざるはなし、臣民の安寧幸福を保護せらるゝは、固より、言を待たず、此の國體に基き此の皇運を扶翼し奉る臣民の本分を全うせしめ給ふ叡旨に基くことなれば、我が國法は、世界一般の國法と稱するものと、徹頭徹尾其の精

神を同うすとは云ふべからざるなり。臣民たるもの之を思ひて、益、遵奉の志念を固くせざるべからず。

謹みて案ずるに、我が國、古來、金甌無缺萬邦無比の國體を持し、皇威を海外に輝かしゝは、固より、皇祖皇宗の威烈に由ると雖、亦、其の臣民たる、我等祖先が、義勇奉公の念深かりしに由りてなり。古來、天兒屋命、天太玉命の、祭政を賛け、武甕槌命、經津主命の、威武を輝かし、天忍日命、天津久米命の、帶仗啓行し、猿田彦命、大山祇命の、指導輔翼其の他、可美眞手命、道臣命の、功を、征討に立て、大彦命、吉備津彦命等の將軍となりて、諸道を治め、日本武尊の、東征西伐、賊虜を掃蕩して皇威を恢にし給ひしが如き、皆、皇運を扶翼し、天業を贊助せられしにあらざるはなし。繼體天皇の詔勅に、道臣陳レ謨而、神日本以盛。大彦申レ略而、瞻瓊殖用隆。(道臣は道臣命、神日本は、神武天皇の御事。大彦は、大彦命、瞻瓊殖は、崇神天皇の御事なり)とは、義勇、公に奉ずる謂なり。其の他、和氣清麻呂の氣節、藤原隆家の大和心、北條時宗の英斷の如き、枚擧に遑あらず。皆、綱常を扶殖し、元氣を培養するにあらざるはなし。此等非常の時に當りて、廓清の業回天の功を致せる我が祖先の遺風を思はゞ、天常無窮の皇運を扶翼し、外國の侮を禦ぎ、國體の精華を發せずして、可ならんや。凡邦國の盛衰消長は、其の國民の元氣の振否如何に在り。吾等臣民たるもの、常に、溝壑に在ることを忘れず、一旦事の緩急に遭遇することあらば、蹶起奮進して、必、本分を全うすべきことを忘るべからざるなり。

孝女さよ女

田山とり子

都下、深川北川町に按摩をとりて世をわたれる、盲人春養といふものありけり。性質實直なるものなりしが、不具なるに加へて、いと貧しかりければ、年頃、妻といふものなくて過しゝを、人々のなさけにて、しもといへる女の、小夜といへる娘つれたるを迎へぬ。さて、この小夜、よく父母に仕へ、父は盲目なればとて、殊にいたはりかしつきしが、とてもかくても、一家三人の活計に、盲人の細き杖一本を柱と頼むは、いと難きわざなればとて、ある武家の許に奉公せり。もとより心がけことある娘なれば、閑を見ては、手をならひ、琴ひくことを學び、また、僅の給銀の中より父母におくりし殘餘を、いさゝかながら貯置きて、四書孝經の類を買求め、夜更くるまで一心に讀習ひける程に、三四年の後には、あはれ、諸藝一通を習修めけり、而かも、主人の用は、他の分をさへ助けて、いさゝか怠ることなかりき。かくて、年月久しく盲人を母の手一つに賴みおかむも心もとなしと、暇を乞ひ家に歸りて父母を助けぬ。これより、小夜女は、近所の娘小供に手ならふわざ文よむ道を敎へ、乞ふものあれば、琴、生花、茶湯さては裁縫を敎へ、女の道のあらましを諭聞せければ、わが家計の困難のゆるべたるのみならず、おのづから、女の童の風儀よくありて、世の親々の心をして安からしめき。

堀部武庸の妻

山本正周

淺野長矩の臣、堀部金丸の女、幸といへるは、武庸を婿に迎へ、未だ合巹の禮を行はざる中に、主君長矩公、不慮の事にて、死を賜はり、御家斷絕に及びければ、金丸、武庸の兩人は、大石良雄に與して、復讎の事を謀る。女幸は、ひそかに、之を知り、母と共に、諸國を經廻り、神社佛閣に詣で丶、事の成就を祈請しけり。父、及び、夫、年來の宿望を遂げて、自刄せし後に、江戸に往き、髮をおろして尼となり、自ら妙海と號し、父、及び、夫の菩提所なる泉岳寺にいたりて、さゝやかある庵を結び、朝夕に墓を掃ひ、香華を供へて、亡魂を吊ひける。かくて、九十一歳にしてみまかりけるとぞ。



女禮

婚禮式（承前）

有住常子



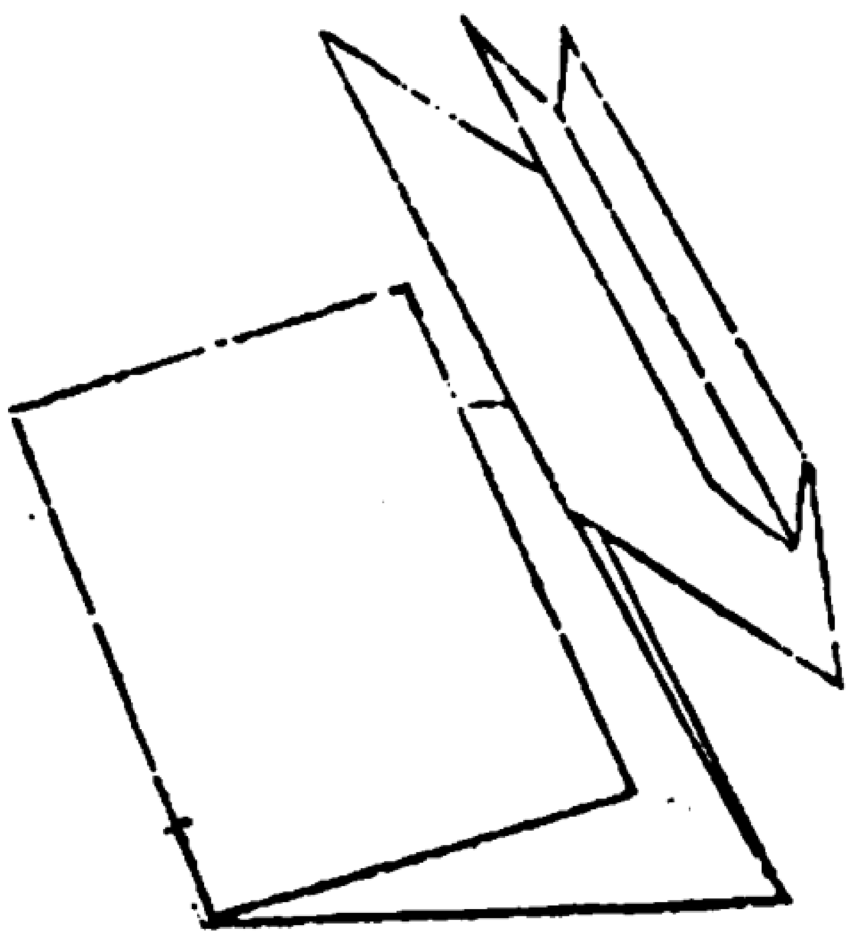


折方

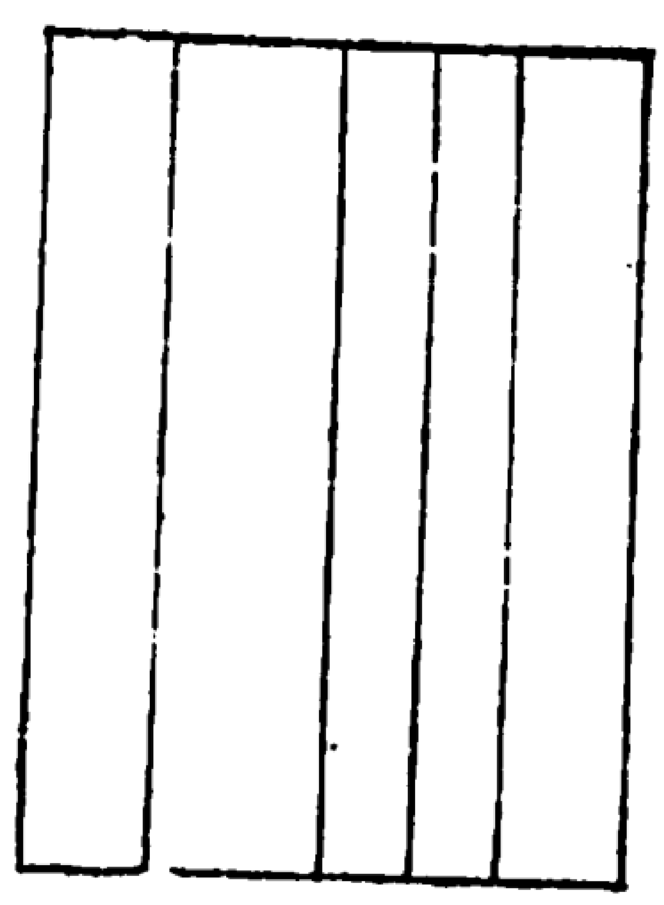
樽の手包

有住くわう子

是は柳樽につく、水引かけるあらひ、結び付るあり。



(りがわりを)



茶の湯

茶禮初學(前承)

孤峰奄碌仙齋不羨

關葦雄

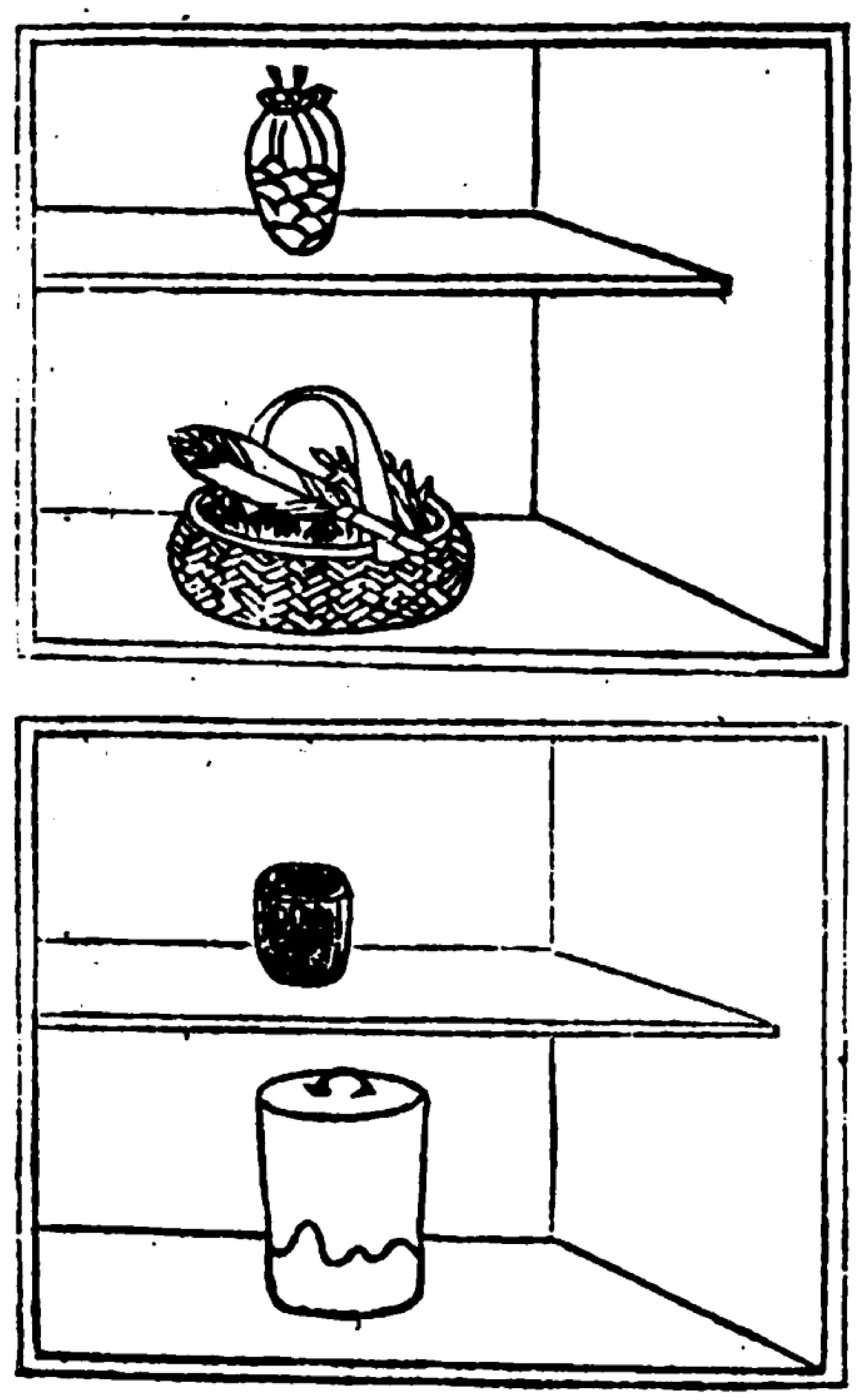
道庫　利休居士發明　本品は赤身杉

(但し文字には洞幸とも書す)

老人の設置きて遣ふものあり。

註釋、不羨曰、道庫と言ふものは、四疊半點前脊後の壁の中に修理し置きて、行歩に不自由を感ずる人、茶道具を飾り置きて自在を得せしむるもの也。如圖、中に一重棚在り。前二枚の曳違太鼓張手掛あり。飾り、地板に炭斗、棚に茶入、袋は釘に羽箒

下に、香合如レ圖中棚、茶入茶碗柄杓は釘にかける。下に、蓋置、特に此の棚の特旨は、背後の方に小狭なる口あり。幅壹尺高さ壹尺貮寸。此の口より水差の出入することあり。此の棚の名義は、傀儡師の元祖を道幸坊と言ふ故、茶道具をかくし置きて、自在に扱ふが故の名ありと。面白き説あり。人間は、男女共老衰しては、兎角、誰も彼も足脚が不自由を感じ、時に、居たり立たりか迷惑なり。因つて、物品茶具を持ちては、最困難なる場合を覺ゆる故、如レ此のものを發明して、自由を與へたるは、茶祖利休居士の苦心經營可レ思知。後の人敬伏の外無レ之、一言もなき次第難レ有と言ふの外なし。婦女史方には、稽古の中に覺え置れて後年、嬰兒等を敎育する家庭の實際に活用せられ、又、老年に至りて、逸樂の茶道に應用せらるれば、最完全ならん。啻、道具を持ちて居廻るが、僅少煩はしけれども、立居に比較敵すれば、何の事もなしと云うて可ならん。



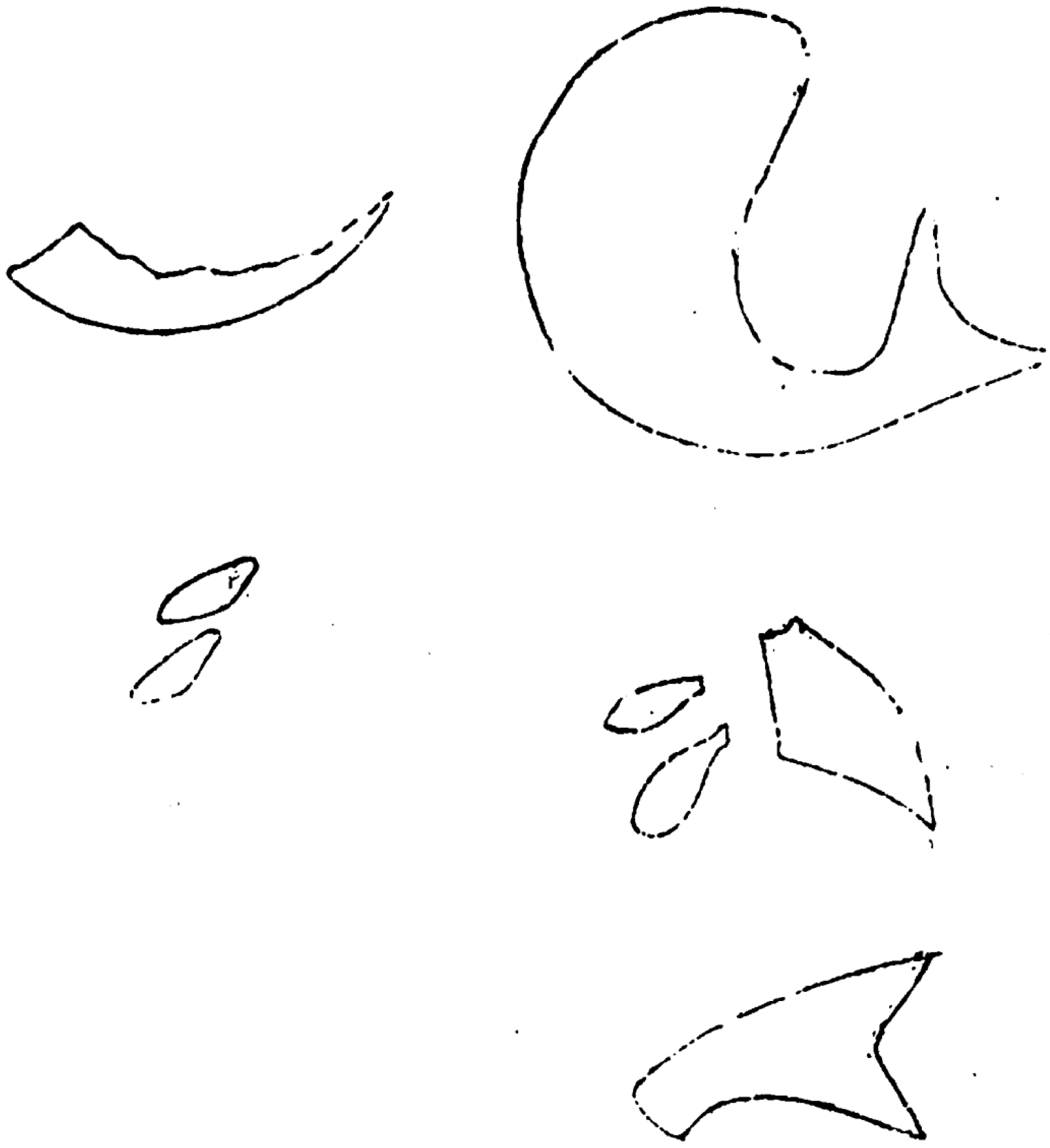
たちぬひ

家政

匂ひ袋

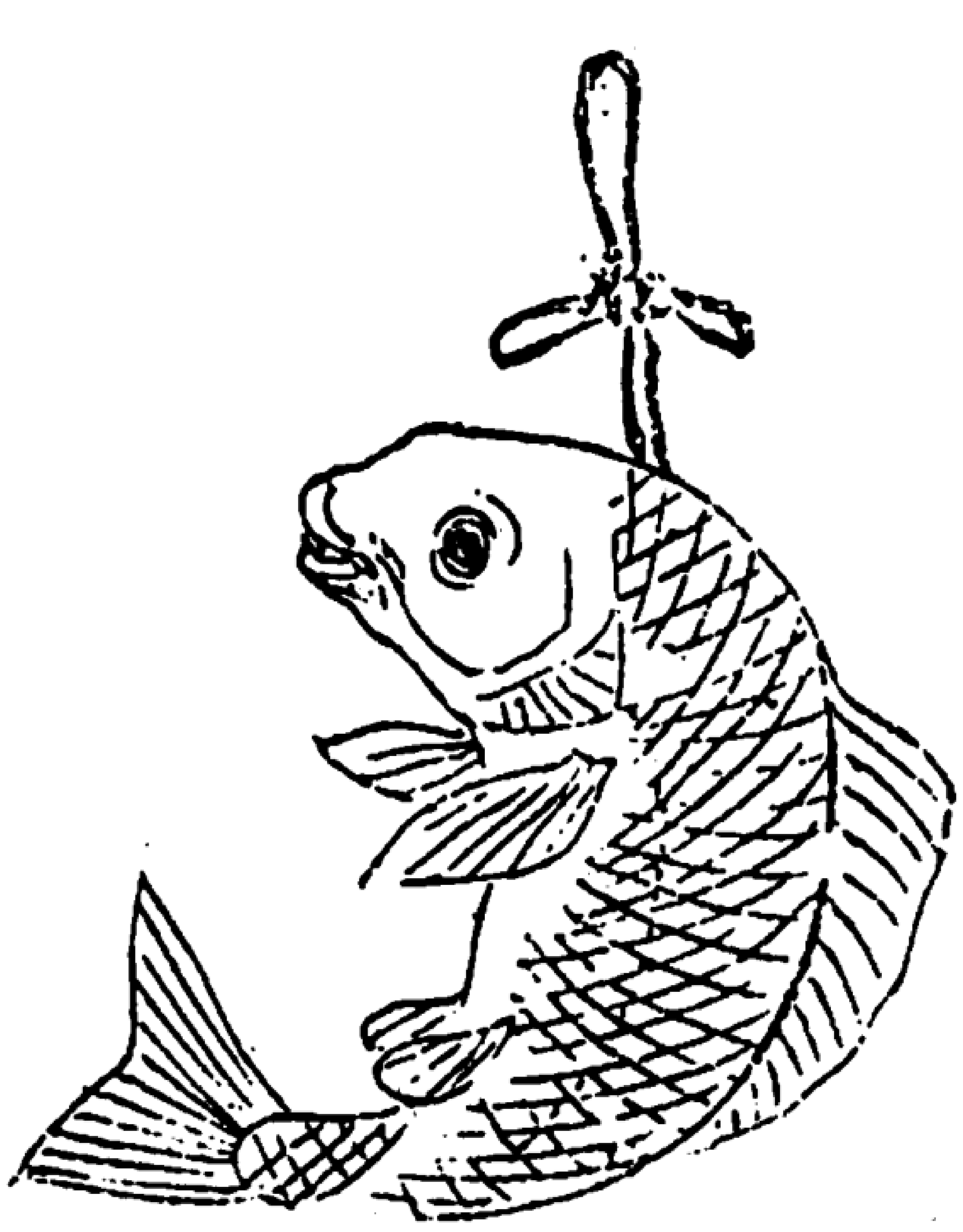
西山たい子

鯉の形



まづ、右の圖の如き形に、厚紙を切りおき、匂ひ綿を入れ、切をきせ、左の圖の如くくみ合せ、かしらの所へ紐をさげ、裏表を合すべし。但し、色は黒にしては、あまりにきたなく、ひき立たねば、かば色ぐらゐにおし、黒を、背、くび等に、ぼかし入れたるがよろしかるべし。背のひれは、どうと同じ色なれば、墨にて、ぼかすとき、分けめをつくるべし。鯉は金に光るもの故うろこは金などにて引き入るゝいとよろしかるべし。目も金に入れてよし。左の圖を見合すべし。

その圖



だいどころ

季節料理

鰯の水晶あげ

新鮮き鰯の、頭、腸、骨を去り、葛粉を、水にてとき、天麩羅の如く、衣をかけ、別に、鍋の中へ、酢と水とを、等分にして、沸騰したる、中にいれ、揚て、生姜、醤油にて、食すべし。

信田卷

油揚の、一方をさき、湯煮して、能く洗ひ、油氣を、去り、海老の、皮を去り、こまかにたゝき、油揚の中に、いれ、稲荷鮨の様に、まんなかを、干瓢にて、結び、味淋醤油にて、鹽梅し、煮て、用ゐるあり。

牛の蓮根煮

牛肉を、味淋醤油にて、鹽梅し、煮込み置、蓮根の、皮をむき、わさびおろしにて、おろし、牛肉を、煮たる汁にて、味をつけ、煮あがりたる、ところへ、前の肉をいれ、かきまはし、温たまりたる時、器に盛り、出すべし。七色唐がらしを少しふりかけるも、よし。

燒肉醤

玉葱、胡蘿を、薄くきり、香草、何にても、一種を、加へ、脂肪を、解し、野菜、肉汁肉、又は、鳥の骨等を、いれ、鹽と、胡椒をふり、文火にて、上下を、かきまはし、香ばしき、匂ひを、つくべし。さて、骨も、肉も、黄色に、ありたる時、水少しづゝを、加へ、又色のつきたる時、肉一斤に付、水八九合程の、割合にて、煮込むべし。浮かすは、スープを、つくるとき、のごとく、たびた

び、すくひとり、捨つべし。

牛肉醤

先づ、鍋にて、牛酪を、とかし、きざみたる、玉葱を、とび色に、なるまで、煎り、牛肉をいれ、五時間程、煮て、鹽胡椒を、能程に加へ、裏漉にて、おしつぶし、なから、こすべし。

割烹と禮節（承前）

石井泰次郎

第二編割烹敎授

（第一節近來の敎師と敎授法續）

増田順子

女子師範學校附屬の割烹科の敎師として、其の職を負擔すと聞けり。其の敎授法の實行に於ては、其の可否を云ふ事を得ずと雖ども、其の說所に就て考ふるに、或は、學校敎師としての位地は、此の人に由て定め得らんかと思はる、節無にしもあらず。そは、其の意見と敎授法を發表せる某雜誌の家庭欄に於て見る事を得たり。曰く、

食物の調理につき

人は食物を要し、身體の滋養となる原料を穀物野菜鳥獸魚介菌類及海藻の類より取れり、されど此等は、皆、其の物、其の儘にて食し、滋養となる物至て少なく、食物は、殆ど調理の後に非ざれば、口に上す可からずと云も誣言には非ざるなり。されば調理する材料は、つとめて滋養分に富み消化し易き物を撰むは、必用なれども、食物は、經濟上に關する物なれば、貧富貴賤の度に應じ、奢侈に陷らざる樣廉價の材料を以て珍味を調理すべし。總て食物は、衛生經濟に重きを置き、氣候の寒暖身體の強弱老少を參照して、原料の撰擇

炎炙の加減、各種の取合せを考へ、右の目的に適する樣、日常の調理に注意する時は、研究を重ぬるに從ひ、自然に工夫を凝らして、各自の了簡次第新案の調理献立共に無盡藏なるに至るものあり。

扨、身體の滋養となる原料は、種々の食物中に存する物あれば、適宜に混食する樣、一週間若くは十日間毎に、朝晝夕の三食に要する材料を、各種の點に注意して、豫め献立を記載し、置く時は、材料の購入調理の仕方に便なるのみならず、經濟上にも亦大に必要なる事なりとす。されば、日常調理の參考の一助とせん爲め、季節の材料を以て、普通の庖厨にて調理し得る食物を撰み、三食に供する献立を記載して、其の調理に注意すべき要點を擧ぐべし。

普通の庖厨に備ふべき道具

竈、焜爐(以下器物名稱七十餘種をあぐ)

日常庖厨に備ふべき食品

米　味噌　醤油　食鹽　砂糖　酢　味淋　胡麻油　製脂　牛脂
堅魚　糖味噌　香物

其の他魚類の不漁の時に之に代ふべき食品、即ち

雞卵　乾海苔　椎茸　干瓢　燒麩　豆類

食物となすべき材料の遣ひ樣大畧

	名稱	製造品	他物に混じたるもの
穀物類	粳米	飯　新粉　麹　干飯　燒米	酒　飴　酢
	糯米	餅　白玉粉　麹　道明寺　菓子種	强飯　飯　味淋
	大麥	飯　挽割　麥焦　萠　壓搾麥	ビール
	小麥	(以下大豆小豆粟蕎麥等の名稱製品混合物を擧げたれどはぶく)	

汁の實	煮物	浸物和物	漬物	揚物燒物	刺身鱠のつま
大根	生麩	菠薐草	大根類	甘藷	大根　菜類　九面芋
甜草	菜類	馬鈴薯	人參		

(以上野菜類に屬せる遣ひ方にして其他菓物肉類海藻と無記したる物約三十行あれど爰にはぶく)

次には、魚介類をあげたる、其の品目所屬は、

煮肴　燒肴　刺身及膾　蒲燒及しんじよ　鹽肴　干物

にして約十八行百餘種をあげたり。而して、其の終に記して曰く、

右は大略を區別せしのみ。悉しき事は日常の調理に述べ、魚獸の肉類も、茲に省き、後に記さんとす。

日常調理

一飯

かく記して、飯をたくに附いて、割合一人に付いて何々、水加減、炊き方、注意すべき事、附記等を記して、悉しく説明せり。約六十行にわたる。

一味噌汁

かく記して飯を同じく、割合、つくり方を記せり。

一かつをぶし煎汁取様

かく記して、説明する所、二十七行にはたれり。

一香物

かく記して、又能く説明せり。次には、採合表をあげて、左の形式によりて記せり。

第一日朝　晝　夕

此の形式の次に其の拵へ方をあげたり。其の所説を筆記せる文章は、不明瞭ながら、其の説明の懇ろなるは、一事を記すに多行を要したるにて知られたり。

扨、此の敎師も又、我家翁が割烹學校創立の際の門下生の一人にして、既に卒業證を受けたり。





學藝

國文學講義

井上頼文

紫式部日記（四）

觀音院の僧正、ひんがしのたいより二十人の伴僧をひきゐて、御かぢまゐり給ふあしおと、わたどの丶はしの、とゞろ〳〵と、ふみならさる丶さへぞ、こと〳〵のけはひにはにぬ。法住寺の座主は、うまばのおとゞ、へんちじの僧都は、ふどのおとゞに、うちつれたる淨衣すがたまで、ゆゑ〳〵しき、からはしどもをわたりつ丶、木のまをわけてかへりいる。ほども、はるかに、見やらる丶こ丶ちして、あはれなり。さいさあざりも、大ゐとくを、うやまひて、こしをかゞめたり。
人々まゐり、つれば、夜もあけぬ。

○釋義

○觀音院の僧正　名は、勝算といへり。僧正、は僧侶の官位中、第一の官なり。その等級は、大僧正、僧正、權僧正の三等に分たれ、大僧正は、大納言に、僧正は、中納言に、權僧正は、參議に准ぜらる

○ひんがしのたい　東の對の屋なり。三内口訣に、

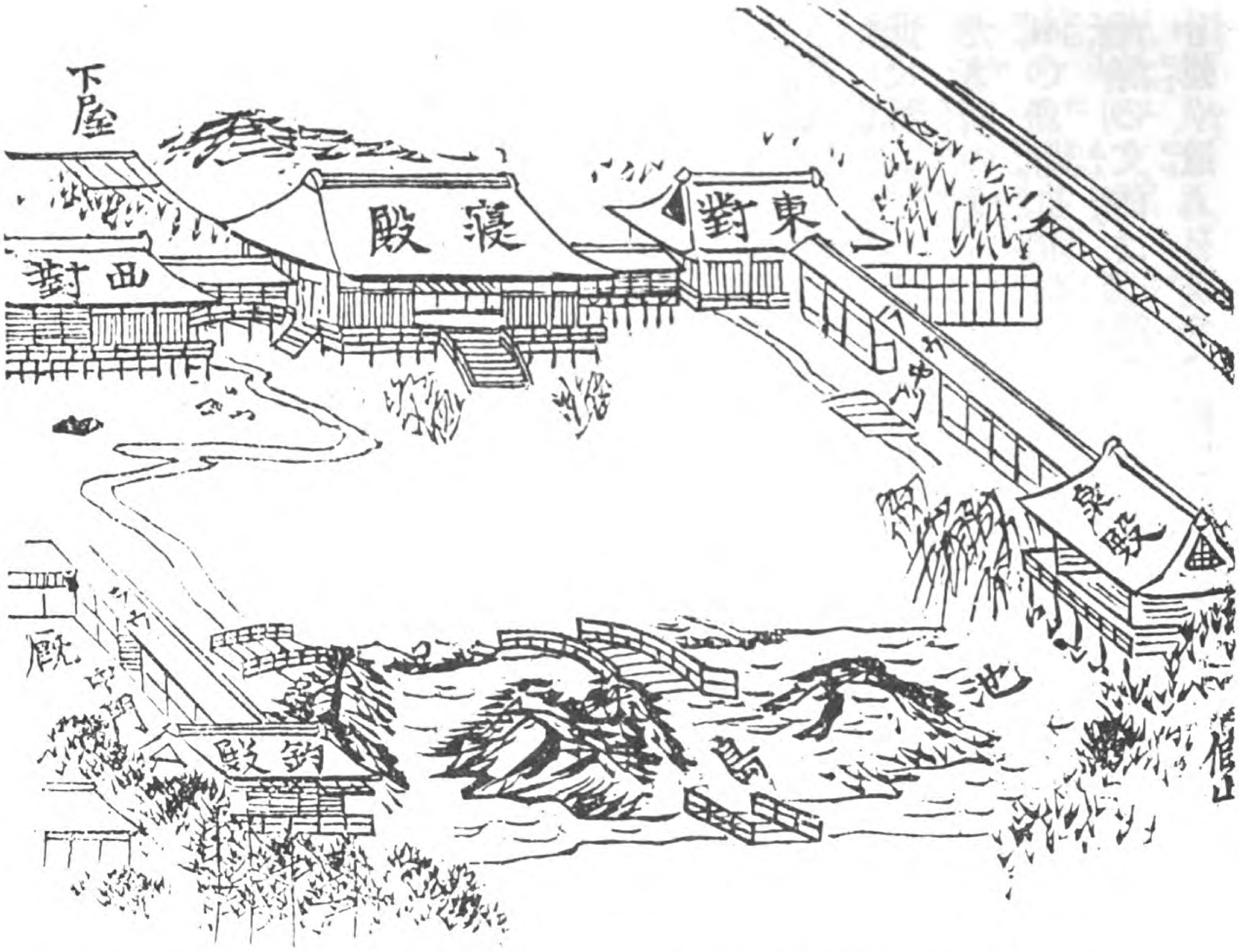
對ノ屋二　東を一の對と號し、西を二對と號す。北ノ方と、東西行、如二鳥翼一作レ之、對とは、主殿（寢殿あり）に對する義あり。武士の家に、奥屋と稱す。是故實也。堂上の諸家には、

對屋と號す
と、見え、また、其大さ主殿に相同じとも見えたり。

およそ、中古貴人の家のつくりかたは、寢殿造とて、先づ、中央に寢殿あり。それに對ひて、左右に立てたる家あり。その東なるを、東の對、西なるを、西の對、北にあるを、北の對といへり。その寢殿より、對の屋に通ふ路は、おほかた廻廊あり。この廻廊の橋ある所を、渡殿といひ、反橋の上なるをば、反渡殿とも、反渡廊ともいへり。なほ、寢殿造の、おほかたを心得ざれば、この日記に解しがたき所おほかるべければ、今、澤田名垂ぬしの、家屋雜考の中より、その概略を節錄すべし。

寢殿造

寢殿の造方は、大抵、七間四面を常法とす。或は、五間、或は十二間なども、なきにあらず。三光院内府の御記に、主殿は、七間四面通法とみえ、源氏物語、梅が枝の巻に、七間のしんでん、廣く太きにつくりなしなどもみえたれば、七間四面は、中古以來通例の間數と見えたり。舊說に、其制一丈を以て、一間とし、柱を立て、是を大間といふ。丸柱、總板敷、屋上は檜皮葺にて、四方葺卸あり。是を四阿造といふ。是、その大概なり。大間の事、延喜式をはじめ、さま〲見えたれど、後世は、必しも、しからず、六尺三寸を以て一間としたる事どもゝ見えたり。さて、その七間四面の内、五間四面は本屋にて、其外一間通りは廂なり。其外に簀子あり。此五間四面の本屋をさして、母屋といふ。身屋、身舍なども かけり。延喜式、江次第等に見えたり。母は假字にて、面屋の義とも、また、身は、



諸木の幹に准へて、身屋といふべきを、母と轉じよぶありともいへり。四方上下長押ありて、母屋は、廂より少し高し、格子、又は、妻戸ある所は、柱毎に、欄檻あり。其外の一間通りの廂を、廣廂とも、廣縁ともいふ。柱、長押等、母屋に同じ、大底、廂の四方は、格子にて、四隅に妻戸あり。下略

漢文學講義

佐々木天游

書墨竹後

林鶴梁

戊申竹醉日。同人來會ニ余家一。酒半。秋暉作ニ墨竹數枝一。座客各題レ詩。醉不レ能レ書者。與ニ不レ臨レ會者一。異日就ニ餘白一追題。今觀レ之。筆迹灑落超脱。不レ問可レ知レ爲ニ醉書一也。不ニ亦奇一耶。距ニ竹醉之日一。十又七日。鶴梁老人。晩酌醉中。漫識。于レ時窓外風

竹顛倒。猶有ニ醉態一。此君久苦餘醒者非耶。爲レ之一笑

戊申の竹醉日、同人來りて、余が家に會す。酒半にして、秋暉墨竹數枝を作る。座客各々詩を題す。醉うて、書する能はざるものと、會々臨まざるものとは、異日餘白に就きて追題す。今之を觀るに。筆迹灑落超脱、問はずして、醉書たるを知るべきなり。亦奇ならずや。竹醉の日を距る、十又七日。鶴梁老人、晩酌醉中、漫に識す。時に窓外の風竹顛倒、猶醉態あり。此君久しく餘醒に苦むもの非耶。之が爲に一笑す。

此は林鶴梁先生が、墨畫の竹の後、書き誌されたる所の文であります。書レ後は。矢張文の一体で、題並跋など丶、同じ文体であります。凡、此等の文体は、簡勁と申して、語を短くして、筆を強く遣ふを以て、貴しと致すのであります。

偖戊申のツチノヘサルの竹醉日、(花鏡に五月十三日ヲ、竹醉日トナス。是日種ル者ハ、活シ易シトありまして、竹醉日とは、五月十三日のことであります。此の日に竹を移し栽うれば、枯れぬと謂ふ所からして、此の日は、竹が醉うて居りまして、遷易らる丶を、知ずして居るからダラウと、謂ふことから、古より此の日を、竹醉日と、申傳へてをります。)の五月十三日に、同じ社中の人々が、來りて余自分の(鶴梁先生自分なり)家に、會合致しました。サウシテ、今が酒宴の半頃と云ふ時分に、秋暉と申します所の人が、墨畫の竹を、幾枝も書れました。サウシテ、同じ座中の客人が、面々に、其の墨竹の上とか、傍とかに、詩を題し書れました。サウシテ、其の座中に列りて居る人でも、餘り酒を飲み過し、酩酊して筆をとりて、詩とか何とか書くことの出來ぬものと亦、同じ社

中の人でありながら、何か差支がありて、今日の會合に、來り臨みて、出席せざる所の人とは、異日の他日、(異日は異なる日と云ふことにて、他日と云ふに同じ)に其の書殘して、あります所の白紙の所に就いて、後より追うて、其々思附のことを、題して書きました。今の今日、之を披きて觀ました所が、其の墨竹の筆の迹が、瀟落と、サッパリトして、傾着する所なく超脱と、法則などに拘ることなく、俗氣を超離れ、脱出て、一向に屈托のなき所が、唯々一見した計りで、問ひ尋ねても、醉中に書いたものであると云ふことが、知るゝのザヤ。(可レ知也 。シラル 、ノ ザヤと云ふ程の意にて、也は決語の辭なり)が不二亦奇一哉で、亦何と、奇妙なことではあるまいか。)耶は疑の辭にして、乎字哉字と。略相類した字でありますが、但其の相違する所は、微く婉轉詰問の意を、帶びて居りますので、乎ノ字哉ノ字に較べてみますと。悠長の意味を持つてをります。一口に申しますと。俗語のデハアルマイカと謂ふ程の意なり)五月十三日の、竹醉日を距ること、十日あまり七日。即ち五月の三十日に、鶴梁老人、(鶴梁先生が、自ら自分の名を、稱せられたものなり)が夕酒を酌み飲みて、其の、醉うて居る中に、漫りに如レ此、筆を採りて、書き識しました。于レ時。其の時に、窓の外の竹が、風に吹かれて居りまして、顛倒と、ヒツクリカヘリ、サカサマになりて。竹の枝や葉やが、風に吹きすさばれて、ヒツクリカヘリテをりまして、今日になりましても、猶矢張、醉うて居る樣に、容態がありまして、フラフラと、顛倒して居ますが、此君(此君は、竹の異名であります。晉書王徽之字子猷。寄二居空宅中一、便令レ種レ竹、嘯咏曰、何可二一日無一此君。とあります。此故事

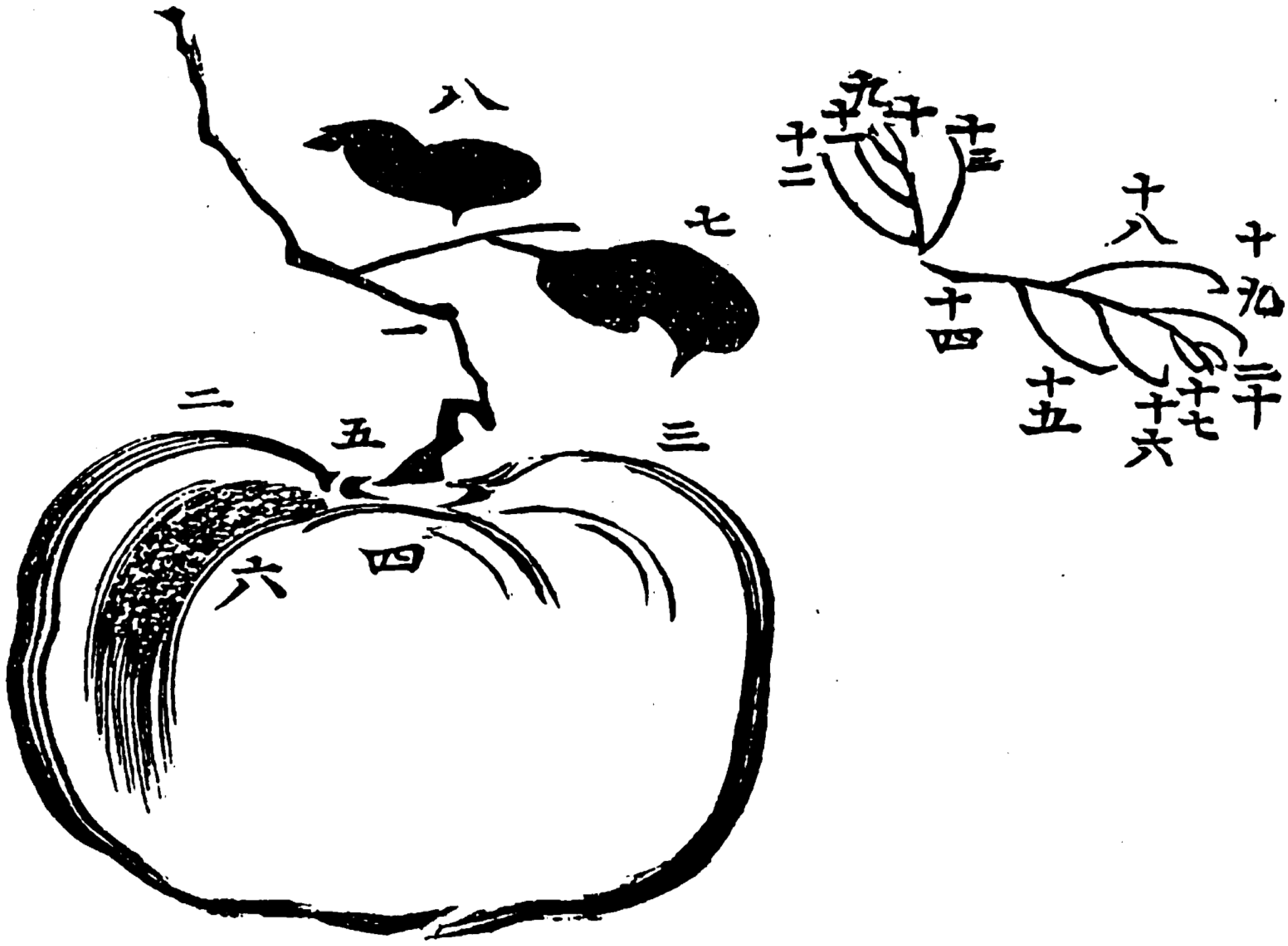
よりして、竹のことを、此君と申します)の竹が、久しく(五月十三日の竹酔日を距る、十七日の後あれば、久しくと謂ふ)酒の酔が醒ぬで、餘り殘る所の酔病、餘酲々は二日酔のことにて、字書に酲酔未レ醒也とあり。又病レ酒曰レ酲ともありまして、酒に中らるゝことあり)に苦み、五月十三日の酔が、今日迄醒めずして、酒に中られ苦みて。顚倒して居るのデハアルマイか。非耶サウデハアルマイカ。(非耶ハ。一旦餘酲に苦んでをるのデハアルマイカと謂うて、更に亦、非耶。サウデハアルマイカと、謂直たものであります)竹の様子が、風に吹かれて、顚倒して、マダ酒の酔が醒ぬ様に見えて。面白きものでありますから、之が爲に、ハア、と一笑しましたと、微しく洒落て、面白く筆を結びたものであります。竹酔日と謂ふことに因みて、酔と謂ふ一字を骨子として、玆文を書きましたもので、何事もなき様なことなれど、矢張是が文士の思附であります。一体は晩酌酔中漫識と、謂ふ所迄で、文の一段落をなして居るので、干レ時以下の二十五字は、所レ謂文の餘波波瀾であります。

和畫通信講義　第貳回

山崎彩峨

果物

この果物は、即ち曲線よりなれるものにて、符號の順に描き、四六の線に至らば、筆を、水なき器皿にて、右肱の方へ、筆の腰を向け、斜めに器底に、毛先を附けたるまゝ、後方に、おしめに腰を上方へ轉廻すべし。さするときは、意の如く、筆毛を細分し得べきなり。かくて、全體を描き終へたらば、淡墨のくまを入れ、乾きて後に、小點



を淡墨にて、打ち込むあり。

又顔料を用ゐて描かむとならば、赭墨（代赭と墨と和したるもの。）を以て幹、並に、周縁の線を書き、藍と雌黄とを和したるものにて、葉の表を描き、黄勝ちの草色にて、葉の裏を書き、後、よく、筆を水にて洗ひ、先きへ、雌黄をつけ、線の内部に沿ひて、隈を施し、（半程にて黄色消亡するやうに水にてぼかすあり）乾きて後、赭墨にて、小點を打つあり。



漫録

女訓綾廼雛形（承前）

揖取素彦

一尊者より物賜らば、さのみいなまで受くべし。それも、事により、品により、一應斟酌まをす事はともかくも、強くいなみ申すは不敬なり

一人より贈られたるものは、何品によらず、二親の前へ持參して見せ申すべし。食物ならば、まづ、父母に進め、兄弟などへも分つべし。淸き品あらば、靈前へも初穗を參らすべし。時新の果實類、すべて烹飪を經ざる品ならば、神前へ供しても苦しからず。

一婢僕へは、情ふかくあはれみを加ふべし。同じ人界に生を受けながら、命運拙くして同類に使役せらるは、あはれみおもふべし。古人の言に彼も亦人の子也とは、實に、よく申されたる言ぞかし。古き俳諧の發句に

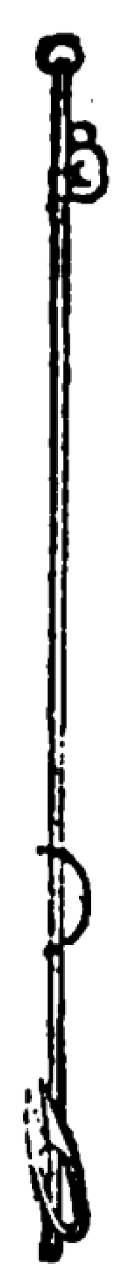
我が子なら餘所へはやらじ夜の雪

主の婢僕を使ふは當然の理、使はるゝは從者の本分なれば、やむを得ざる用事の使に出し遣るに、折しも大雪ふりて、日もすでに暮れぬ。いとをしと思ふ我が子ならば、一足も外へ出すまじきに。嗚呼せひもなし。彼を使ふ事よと歎せし、主の惻隱言外にあらはれたり。かくの如き心もて人を仕はゞ、勞すといへども怨む事は有るまじ。人を使ふは、口舌を以て指令するものとおもふべからず。たゞ、我が誠心と正しき行狀とをもつて、彼より甘心悅服する樣に指令す

べし。これを教誨するも亦然り。不言の教をもて感化せしむべし。もし不調法の事あらば、成るたけ、手をかざして、其の過を目立ぬやうに執り し、蔭にて、物和らかに向後をいましむべし。

一家に客の參られたらんに、申次をはじめ、給仕等まて召仕ふものあれば、それに扱はすべし。茶を煎じ、菓子抔いだす用意は、二親のおふせをうけてみづから扱ふべし。自然、召し仕ふものもなき時には、自ら立出で、客の姓名と來意をよく承り親達へ申すべし。姓名をよく聞くべし。もし覺えかねたらば、靜に聞きかへし、または、手札を乞ひてもくるしからず。さて、座敷へ請じ申せとあらば、客の前に手をつかへ、そのよしを申し、先に立ちて座敷へ案内すべし。客の眞先に立つはわろし。客の少し左に立つべし。客、貴人ならば、敷居の外にて脇へひらきつい居て、客の席に着くをまち、一禮して奥へ入り煙草盆茶など參らすべし。なみ〳〵の人ならば、案内して、座敷のうちのしもてについ居て、一禮すべし。

一客の歸る時、婢僕なくば、立出で丶、上り口の戸障子際に扣へて、見送るべし。女子は式臺まで出づるに及ばず。客の從者あらば、煙草の火、茶などをも心づけ遣すべし。但、煙草盆茶などの出し樣、饗膳の給仕の樣体は、別に題目を設けて示すべし。



斧のに（八）

松竹荘主人 寄贈
荒木田麗女 遺稿

君はいり給へど、とみにもねられたまはず。にはかに、心にものゝなやましきを、いとわろきぞかしとねんじかへして、思ひけち給ふひとりねも、いとゞくるしう、かたはらさびしきまゝに、京のことおもひいでられて、うちに、いかにあやしう思しめすらん。内の大臣には、たづねやし給はん。さての所々には、わがすき〳〵しさにこそとりなすらめ。あるじの心もてするわざはひなどいひしは、此の日ごろ、おこがましうむねをくだきける、左の大殿わたりのことにこそあらめ。世にものゝきこえありて、殿など、思しうたかはゞ、まことに、かんだうもおぼろけならんやは。いかにも〳〵、人わらべに、はぢかはしき事もぞいで來なん。よしや、わが身はいたづらになしつとも、いふべきならねど、人の御身にきずつけ奉らんことは、いとくやしからまし。内の大臣の君、さばかり心うつくしうおいらかなるものを、なほざりに思ひなし、あいなきものを思ひ給はんこともいとをしう、かたちはさらなり、心ばへらう〳〵しうよろづとゝのふりて、げにすぐれてなんなきえらびにかなひつべく、つひのよるべとせんに、たらひたる人さまにこそはとおぼゆるを、なにごともあかぬことにして、今までに、あやなきすさみをのみしつゝ、さま〴〵に、心づくしなるめをも見けるならん。うかりし筑波山に、物こりだにせられぬを、神佛もにくしと御らんじて、かうしらぬ所にすてさせ給ふるにや。しばしも、やすからぬ思ひばかりを身にそへて、たゞひとりさすらふるも、

ものゝむくいにこそはあらめど、いと所せう、そらおそろしくおぼえ給ふ。とさまかうさまに思ひつゞくれば、いとゞ心のみすみまさり、みじか夜もあかしがたく、すゞろに、こひしき人おほく、千鳥のもろ聲もがなと思せど、山邊なればたゞ、ほとゝぎすのみ空にひゞきて、かた戀は、げにとあはれなり。君枕をそばだてゝ、

郭公なきてかよはゞ故郷の
　いもがあたりのことやとはまし

きくはかなしきとひとりごちたまふ。又の日も、ありつる物語の殘りゆかしく、あるじのけしきも、なほ、たしかに見んと思せど、今日は、雨に餘波なく風の色もさはやかなるに、おきなもまゐりしかば、又、山にゆきて、かはらぬ碁のあらそひにうちまぎれてくらし給ふ。夜に入りては、雨そゝぎいでたり。おきなもとゞめて、ふみども見かはしとり〳〵に、詩つくりなどし給ひけるはては、又、ものがたりになりて、中將、きのふ、あるじのつゝむことなく聞えしらせ給ひしとのありがたく、身にしみておぼゆればなん、われも、ふたゝび都にかへらんことは物うくなりにて侍るよ。うちつけなるやうにやと、いとつゝましけれど、わざともふみならさまほしきいはの陰道を思ひかけず見給ふることも、さりぬべき勢にこそとおぼゆるがたのもしう、人々も、此のほどなれむつび給ふ心あらため給はで、あはれ、もろともに、月花をもめではやしてありぬべくゆるしてかずまへ給はゞ、いとはいありてうれしからん。みづからも、はやう、つねなき世は住みうく、山のあなたのやどゆかしう思ふ心ふかくなんと聞え給ふ。あるじうちわらひて、人ごとに、さいはぬやは侍る。君は、ことに、若き御ほどにもすぎて、ものゝさと

りあり。御心ふかくおはすれば、おしなべてのさまにはあらず、まことしう、みだりがはしき世中いとはせ給ひぬべきことなり。はた、かくてれはしますとも、よく御心すまし給ふべし。されど、それいと、いふかひなく口をしき御こゝろなり。君は、たゞ、今世にすぐれたるいうそくにて、おほやけの御おぼえならびなくおはすれば、行末ながきことを思さんこそあらまほしけれ。人かずにもあらぬ身こそ、いちはやくそむきすてつとも、さはり所なく人もいかになど耳とゞむべうもあらぬが、こゝろやすし。それだに、我もしと、きそひかほならませど、いとふびんならん。すべて、むかしより、からもやまとも、さえ〳〵しう心ある人とだにいへば、世の中すさまじげに、まじらひもふさはしからずと思ひなし、つかさ位も、やくなき事にして、身のさかえもゆめ心とせず、とみたかきをば、ありなし雲の如見ないて、まづしういやしき山賤となりて、ことなく身のやすからんをのみ、ねがはしうしつるを、又なく心たかしとありがたきことにいひつたふれど、それも、世にしたがひ、一かたにはいかゞ、さだむべき。かしこけれど、君の御心いかにぞやもありて、かはよき人を思しめすあまり、飛火のけふりたゝずとおきてさせ給ふなり、又は政みだれて、さかしらおほく、ねぢけ人はびこりなどする時こそ、いかゞはせんに、身のさんをさけて奥山にかくれんも、うべなりけりな。それだに、つひにをさまれる世まちいでてはたちかへり、山のおくにはすむ人なしともいふめり。高蓋の車は乗者必愛畏多しときらひ、藜杖を牛馬にかへて、たかきもくだれるも閑かなるたのしみを心にかけ世をあながちにのがれんとするをのみなん、めでたし心深しなど

いふほどに、君も、政をたむけ奉る人なくて、たつきなく思しめされ、たからの位もことしげくむつかしとて、おり居なん御心づかひのみせさせ給ひ、政をあづかりまうす臣もなく、つかさ〳〵もみなとけて、とくに、いりこもりたらん時、世中いかゞせん。かへりて、山のおくは人おほく都めかしうなり、九重の宮の中は人げなきさやうにて、あさまつりごともたえ、節會なども音なからんをば、たれか、いみじと思はん。あさましとこそいはめ。このことわりを思し志らば、よきもあしきもおしこめて、ひたふるにそむくを、心はみたりとは思さるまじきぞかし。いとかたはらいたく、思ひやりなき事に侍る。世のうき事にたへずのがるゝは、心かろきやうなれど、そは、すこしゆるすかたもありなん。人は、たゞ、利と名とをおそろしきものにて、身のつゝしみ深く、わたくしなく、君につかふまつらんことを心にかけんこそ、まことしきうつはものとはいはめ。（未完）

茶話指月集（承前）

河東散人鵜巣
寄稿人孤峰菴不美

關　葦　雄

附　利休居士傳　姓名抛筌斎號不審

天正戊子之夏秀吉公擇下長數奇者 數 人上奏 昇二綱位一然宗易獨辭而不レ受レ命還請レ稱二居士一因レ是公命二大德古溪一授二利休居士號一

道陣が小座敷は、西表にて有しを、さる人、晝の客に西日が入りて悪く候はんといへば、陳、朝はかり茶湯すれば、西日のよしあし覺えずとこたふ

註釋不美曰、天正戊子は則十六年後陽成院の

御代、京都北野松原に大茶湯の有し年也。豐太閤茶道に長ずるもの數人を拔適人撰して、位階を賜はらんとありしに、休、獨り是を固辭して不レ受レ之。還、反して居士號を望みしは、德義を重んじて成べし。草莽卑賤所レ謂狩に、茶は、佛意を網羅して一興を樂むものなれど、位記を賜りて、金殿に昇るを不レ悅、淡泊の精神より出たるなるべし。豐太閤の寵遇をも得たる人なれば、願ひても位記を可レ望を、辭退したるは、返て卓見あらん。居士號は、僧門より私に貰ひ得らるゝものなれ共、漫りに是を得らるゝものにあらざるなり。學問に通達し、品行方正に道德備り、知識發達したる人にあらざれば、不レ許不レ與則是を眞の天爵とも可レ謂なり。此の一事に付いても、休居士滿腹の精神は、能、明瞭ならん。

賞讃せずんばあるべからず。

又解釋す。北向道陣の小座敷は、西に向ひたると云ふは、或人の攻擊せんに、陣の答に、朝斗茶をすれば、無差閊、夕陽差入の感なしと云れしは、道陣の頓才氣轉、腕前と云ふも誣言にはあらざるべし。都て、茶は、此の氣轉差略自在に應用出來なくてはいけません。御婦人方も左右です。鳥渡客來り、喫飯の時刻膳部を出し、湯漬にても進めるには、假令總菜と雖も氣を聽すると、甘く出來ます。左すると、來賓も歡びてうまく喰ませう。すると、主婦君も嬉しく思ふ故、始て主客合躰すると、自ら交際も親密に、又、圓滑に成ります、本文には、現に、此の氣轉の主義は舁出してはありませんが、自ら、含蓄して居ます。尙、御考を願ます。

女子用書解題（二）

三浦千畝

林家妊婦養方　一巻

奥書に、「右は林大内記、諸醫之談之上被極置候由、浦山より借寫之、嘉永元年戊申五月四日、水野忠篤」とあり。大内記とは、大學頭林述齋のことなり。此の書は、僅五六枚ほどのものにて、妊婦の食物、又は着帯のことなど記されたり。（此の書視聴草に入れり）

女院小傳　一巻

此の書、東三條院藤原詮子（圓融皇后）以下、陽祿門院藤原秀子（崇光後光嚴御母）まで、女院七十七人の小傳を記せり。後光嚴院天皇を當今とさし奉れば、此の書南北朝當時の作なること明なり。（群書類從傳部にあり）

女院記　一巻

此の書、東三條院藤原詮子以下、吉徳門院藤原榮子（正親町天皇御母）まで、八十三人の御名を掲げ、御父の御名、院號ありし年月等を注せり。女院小傳と合せ見るべし。（群書類從雜部にあり）

女房三十六人歌合　一巻

撰者年代等、詳にせず。我が國名だゝる女房三十六人を撰び各三首づゝ擧げて、左右に番ひたり。歌の作者は、左小野小町、伊勢、中務、齋宮女御、左近等、右は式子内親王、宮内卿、周防内侍、俊成卿女、待賢門院堀河等なり。（此の書群書類從和歌部にあり）

女官飾鈔　一巻

著者、後成恩寺兼良公なりといひ傳へたれど、確ならず。群書類從本の奥書には、「依左金吾基春卿所望下禿筆訖云々、永正三年春日従一位

とあれど、公卿補任によれば、基春の左衛門督に任ぜられしは、永正三年十一月なり。然るに、この奥書に、春日とあるはうたがはし。又群書一覧所引本の奥書には、「此の一帖は、後成恩寺のくわんはく御作也、すなはちかの殿下の親跡の本を、桃花坊へ申しうけ、みじかき筆にて字形をたがへずうつしとゞめ、持て参り返納申候時、御ふたり校合申て、あやまりどもを直し付侍り、大永元年十月六日、左衛門の督藤原○藤原基春」とあり。即ちこの奥書によれば兼良公の著を、冬良公○兼良公の子と基春卿と校合せし由なり。されば、群書類従本に従一位とあるは、一條冬良公の事なるべし。

此の書女官の衣飾の事を記す。女房衣裳の名目、四季の重ねやうのことなど、一通り心得んには、いとたよりよき書なり。なほ、曇華院殿装束抄、衣飾抄、雅亮装束抄など参考せむ益多かるべし。又、群書一覧によれば、始に女房官品の事記せる本もあるやうなり。想ふに、これは女房官品と、女官飾抄とを合せたる本なるべし。

女官装束指掌圖　一巻

この書、奥書に高倉家官服着用圖とあり。但男官、女官、各一巻づゝあるを、こゝには女官の方のみを掲げたるなり。安永八年、多賀中原常政の奥書あり。奥書に曰はく、大久保忠寄云、此の圖雖ニ高倉家當代著用之體也一、與ニ古式一有ニ齟齬一、見者可レ察之者也、云々、尚可レ決者歟とあり。又同追加に、元書無ニ小書一、予小輩、倦見不レ得ニ分明一、仍乞ニ請之伊勢貞丈一、以加ニ小書一、於是、此圖可レ謂レ得ニ光輝一者也とあり。

女官装束織文圖會　一巻

松岡辰方の著なり。辰方は塙保己一の門人にして、有職故實の學者なり。天保十四年五月朔日卒す。年七十七。著書極めて多し。皆後學の珍とする所なり。裝束織文圖會、裝束圖抄、十二單着用圖、小掛着用圖、皇統略圖、官位相當略圖、武家裝束皆具略記、張着着用圖等の十數部は已に印行せしが、後、絕板を命ぜらる。其の外、服忌便覽、手帶腹帶圖式、令式服色圖考、冠圖、位階便覽、親王諸陵考、續門跡譜、涼暗愚抄、續々皇胤紹運錄等、拾數部あり。此の女官裝束織文圖會は、享和元年の著にして、自序に「此圖は女官の裝束を觀、又彩色の圖等を併せて摸寫したるなり」とありて、女帝御裝束を始め、典侍、掌侍、命婦、釆女、舞妓までの裝束の織文を考へ、圖寫したるものなり。

女房百人一首　一卷

この書、群書一覽に「何人の撰なることをしらず、源博高卿奥書の本を以て刊行せり」とあり。我が國、古來名高き女子百人の歌を撰びたること、その書名の如し。

日本紀局考　一卷

藤井高尙の著にして、文化八年の刊行なり。高尙は松の屋と號し、備中國吉備宮の祠官にして、本居宣長の高弟なり。殊に物語を研究し、文章亦一家を成せり。天保十二年に卒しぬ。

此の書は、紫式部が源氏物語を書きて、日本紀局といふ名を得たりといふことに付き、諸書を引きて、かれこれと考證されたるものなること、その書名の如し。源氏を繙かん人は、一讀すべきなり。

日本名女物語（繪入）　五卷

此の書、本朝貞女物語といふものと異名同書な

り。今所書を比校するに、序より巻末まで一字一句の増減なし。全く同一の板なるを、僅にその書題を變へたるまでなり。されどよく見もてゆくに、名女物語と云ふが元の名にして、貞女物語とあるは、書賈どものさかしらにつけたる名にもやあるべき。そは序文にも見えたる如く、我が國古來の名女にして、賢明、仁智、節義、貞心等の聞えあるもの凡そ五十三人ばかりの傳紀を、假名にて記されたるものなれば、單に貞女とのみ題すべきならねばなり。

此の書、作者詳かならず。されど、貞女物語には、元禄八年の刊行とあれば、この書の成りしは、元禄以前寛文以後のことなるべし。繪は例の元禄あたりのものとて、頗る古體なり。

（未完）

女子警醒遺音（一）

白松園主人

能文の士筆を揮へば、咳唾も珠をなすといへり。たとひ斷簡零墨なりと雖、博學洽聞の名家、英才敦行の士の物せられたる者は、吾人に稗益を與へらるゝこと甚だ多きに、まして始めより、天下後世の人の箴戒にとて、記されたることの、いともたふとくかたじけなく、わきて心とゞむべきことあるは、云はでもの事ながら、大方世のわざ繁きならひ、誰も〳〵皆々、文學をのみ旨とすべきにあらねば、散漫の書中より、金片玉屑ともいひつべき、名言佳什を撰り出でゝ見ん事は、容易きわざにも非ざるべし。おのれ之れを思ふをもて、机邊にある書籍のうちより抄出でゝ、あらぬ評言をさへ加へつ。おのれもとより、世渡りのわざに暇

なき身なれば、これかれ多く考へて、時を費すこと能はず、只ひたすら筆を走らするなれば、いみじく杜撰にて、折角の老婆心も、水の泡となり行くなん、いとほいなき心地はすれど、さればとて改むるにも及ばず、池の藻屑かきすてつべき者になむ。

＊　◦　＊　◦　＊

柳澤淇園は里恭と云ひしにより、世人多くは柳里恭と稱せり。性豪放にして博學多藝なり、其の人の師表となるに足るべき者、十六なりしといふによりて、其の一班を伺ふべし。奇才はもとより天稟に出でたれば、其行文の妙一氣呵成にして、しかも寸鐵人を殺す、比々皆然らざるはなし。人と交るに貴賤を論せず、客を好みて、其の家に寓する者、常に數百人なりしかば、家祿多かりけれども、之れが爲めに清貧なりしとぞ。今先づ此の人の手になりたる隨筆、雲萍雜誌中より、世間女子の警醒たるべき遺音を傳へんとす、思ふに必ず琅琅たる者あらむ。

夫婦の中のしたしみも、禮あるうちは珍らかにして、その情至りて深く、又厚し。禮を失ふ時は、その情自然と薄くして、離別もまた遠きにあらず、仁義遜讓は禮を厚うするの中だちにして、この禮、媚諂と脊を合はす、智は痴とさしむかひ、誠は嘘と隣れるさまなれば、心安だてと、愛想づかしとはいつも同居と知るべきなり。

げに、云はれたり、穿たれたり。世間幾多の夫婦が、亂行非道の者益〻多くして、日毎に新聞雜報の種にのぼるを見よ。其の葛藤私怨のおこりは、畢竟禮を失ひて、親愛を破るに基因せざるはなし。方今の女子、嫁するに先

ちて、まづ問ふ處は舅姑の健在と否と、家族の多少とにあり。人情の然らしむる處、煩を厭ひて安きに就かんとするは、すべての習なりといへども、見よ舅姑なく家族なく、夫婦さし向ひの者の禮義正しき者ありや否や、比較的其終を完うする者尠からむ、たとひさまでには非ずとも、勢ひ慣れ易くて所謂懇意づくとなりて、内室殿の氣焔常に高く、風波は全くこゝらの邊に起る者なり、野合の長く繼かぬはもとよりの事なるべく、米國流の自由結婚が、迚も我國情に適せぬといふは、かゝる點よりの事と知るべし。是を以て柳里恭は「離別も亦遠きにあらず」とぞいへる。實に至言といふべし。

仁義遜讓は媚諂と脊を合はすと云ひ、更に智は痴とさしむかひ、賊は嘘と隣れると、窮論

殺到し、遂に本題に入りて、心安だてと、愛想づかしとは、いつも同居と知るべしと、喝破せる、何ぞ其の急所を衝くことの壯快にして、何ぞ其の「同居」なる用語の警拔なるぞ。まことに初めは親しと思へるも後には心安だてと變じ、暫時にして遂に愛想づかしとなり、犬も喰はぬ喧嘩となり、人に笑はるゝ離婚となること定まりなり。こゝをもて、さしむかひと云ひ、隣と云ひ、同居といふ。嗚呼同居なるかな〳〵。迷悟甚だ相近し。彼にまよはずして、大に之を悟りねかし。世のさかしびとたち。

よき事をせんとするはいと難し、只あしきに移るまじとだに心を附けぬるこそ、執行なれ。執行はいつまでといふ限りなし、身を終るまでするを執行とす、わけて婦女子等は、おのれが一箇の料簡

をもて、身を立てんことをはかりて、その親々の敎ふる、手かき物縫ふことなどをば後にして、音曲遊藝を習ふことをさきにするを、捨て置くは、親兄弟の過なり。是は人を便りとせざる育やうにて、縫つむぎの道をしらざれば、女の性をうしなふ。

實に然り。今日商家の娘などにては、大抵學問裁縫などをば後にして、歌舞音曲などに我劣らじとするならずや。是れ畢竟家庭の然らしむるにて、出入の者皆同穴の貉なればなり遂に習へる遊藝の媒にて、淫奔の筋に導かれ次第に身を持ち崩して、果ては手も付けられぬ厄介者となりて、新聞に恥晒をする如くなる。之れ即ち里恭の云はれし、親兄弟の過より生ずるにぞありける。又、人を便りとせざる育やうなり、と云はれし言味あり。女は早晩人に依らざるべからざる者なるに、音曲遊藝など習得せる者に限りて、おのれは之の藝をだに覺えたれば、無理に苦痛を忍んで、舅姑などに仕ふる羈絆ある男に依らずとも、充分自活の道あれば、獨立して人の干渉を要せず、意の赴く處に從ひてなさむのみ、といふ考を起し、初めは一生獨り暮しなり、と威張り、中ごろは女操を破りて其身を忘れ、晩には鬼畜の群に入るに至る者、甚だ少からず、豈歎息の極ならずや。縫つむぎの道を知らざれば、女の性を失ふ、と云はれしも誠に知言なり。女として縫刺澣濯の道を知らぬは、女性としての資格を欠たるなり。女性の品格を欠ぎたる者、何事をなしてか節度にかなふべき之れ等の事は、實際に徴して知るべきなり。

（次號續出）

曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず（其の十六）

白松園主人

去る者は日々に疎く、離るゝ者は親しからざる習ひなり。半六もいつしか待つとはなしに妻の忌も果てゝ、再び奈良へ出仕する身とはなりぬ。初め亡妻の諫めによりて、半七をば奈良へ居て行かざりしに、典膳は疑ひて、何事の心にかなはざる事のありて、半七をば居て來らざる、あすは長子曾太郎娘園花を居て南圓堂に參り、一日遊山せばやと思ふなり、母のなき子は衣服なにくれ不自由なり、明日伴ひて來らずやと云はれしかば、忽地妻の言葉をもうち忘れて、頻りにその言に媚び佞ひ、その日五條へ歸るとやがて、半七にその由を告げ知らするに、却りて半七は母の遺言を守り、出入

只おさんと共にして、相離るゝを欲せず、故にひとり奈良へ行くを觀ばず、おさんも亦半七を放ちて遣る事を望まず、いたくいひ懲さるれば只さめざめと泣くのみ。せん方なければ、曾太郎が武藝の師に弟子入せさせて、奈良へかよはせ、そを口實として典膳が家に遣はすに、此度は互にいなむを得ず、つとめて奈良へ行きて、曾太郎に伴はれ、典膳が家に止宿する事もおほかり。もとより怜悧なる少童なれば、典膳夫婦大に賛歎し、窃に其娘園花の、婿を以て擬せんとせり。

ある日典膳は、妻の數濱に云ふやう、女園花は僅に五才なれど、女の童は大人めくも早ければ、孫は先づ彼よりぞ見るべき、しからば今より婿を撰びて、生涯を安らかに過させんは、親の慈悲なり。われ日來半七が擧止を見るに、その才の長たる事、廣き奈良の藩中に、二人とあるべうも覺えず。……

餘りに心よからぬ典膳も、我子の恩愛のためには、半七の俊秀を知りて、女兒を嫁せしめんと、

思ひ、之れを其妻に謀りぬ。妻も同意なれども、女だけありて注意深く、近頃人の云ふを聞くに、半六が妻世にありし時、それが姉の女兒とやらんをはぐゝみて、ゆく末半七に妻あはせんと、假にも婚姻の盃さへ濟せしとぞ、果して然らば、いふともせんなし。又たとひ、半六御身の威權を羨み、異議なく承引すとも、幼よりいひ名づけの中をさきて、園花を嫁せしめんは、世の物議を招くべしと諫めぬ。典膳之れを聞きて、半七は猶幼童なるに、婚姻を結ぶといふこと疑はし。兎角は面あたり半六に問ひて見んと云ふ折しも、半六は來訪せり。敷波は次の間に退きぬ。

かゝる處に、咳三ツ四ツして、半六は寺院の椽側傳ひに入り來りて、その安否を訊問、さていふやう、このごろは、木の葉落しさやらんまをして、師走よりも却て寒けし、これがため、さるべくは、茶毛も引きて進らすべし、といひかけて、携へ來れる袋包をうち開きつゝ、さし出す者を見れば、鴨ひとつがひを、背き目籠に入れたり。…………

佞人が長官に媚ぶる狀態を、かき出して頗る妙也。徒に昔物語と思ふべからず、當今の聖代と云へども、此の種の醜行尤も多かり。云ふべき事ありとも、只安寧無事を守りて、何事も云はず、云はざれば自然腹立たしと思ふこともなくなりて、公憤とか、義憤とかいふ事は、少しもなくなるが常なり。職務の上に公憤なき時は、情弊のみ多くて、熱誠の光りは消滅するなり、教育界などは、殊に然るべき筈なるに、畢竟私に益する處なしと考へて、怒るべきをも怒らず、俗にいふ、虫を殺すといふ事を力めて、自ら思へらく世渡りの術に熟したりと。嗚呼世運滔々として皆此の如し、實利に疎きは愚鈍なり、詐欺瞞着に長ぜるは英才なり、と教育せざるべからざるに至るべきか。

半六は遂に盟を破りて、半七に園花との婚姻を約しぬ。即ちおさんは亡妻の姉の子にて、別に婿を取りて、家を嗣がすべき者なりと歎き、今は早や老臣の列にも入りたるかの心になりて、阿諛便佞至らざるなし。かゝるにつけても、つら〳〵半七おさんの樣子を見るに、固く亡き母の遺言を守りて、いと睦じきことといふばかりなし、あなうたて、よしなき義理にほだされて、輪篠が臨終の時、おさんを半七の妻と定めおきたれば、彼等おろかにも、童心に之を背かじとするにこそ、かくて年長けなば、いよ〳〵引き放すに便なからむ、その時此の故障によりて、蟻松氏の婚緣空しくならむには、事の破綻は之れより起りて、忽地大事に及ぶべし。今より兎も角もして、密かにおさんを追ひ失ひ、後患をたつに若かじと、おそろしくも決心しぬる、凡夫の智惠こそ淺ましけれ。

こゝに笠松平三といふ藥商人あり。もと田樂の能を興行して、都會繁華の地を渡る者なりしが、一朝災にあひて、生活のもとでを失ひ、熊の膏藥を賣りて、僅に口を糊する身となり、此の頃奈良へ來りしなり。かゝる卑賤の者なれど、頗る俠氣あり、半六之れを知りて一計を案じ、一日之れを誘ひて酒店に至り、之れに酒を强ひて、稍や醉へる時、先づ食はすに金五兩を以てし、おさんを失はんことを托しぬ。されど平三は金を取らず、おのれ賤しき生業はすれど、四十に至るまで惡に與せず、いかでかさる賴を受けんやと云ひければ、半六怒りて斬らんせしかば、止むことを得ず承引し、日時を期し、謀を約して、止むを得ず五兩の金を受けし上に、柏の葉に大の字の紋つけたる割掛枝を、引出物として送りければ、しぶ〳〵受けぬ。

其の次の日、半六は、半七おさんをゐて、輪篠の墓参に行きぬ。成願寺とて四里に餘れる途なり。幼き者を伴ひたれば、歸りには日影斜になりぬ。とある山路の、一叢繁き枯尾花の處をすぐる時、忽地大きなる熊出できて、おさんを嚙み去りぬ。半七之れを逐はんとせしも危しとて、半六は止めてやらず、次の日求めしもあらずとて、遂におさんをば亡き者とせり。半七悲歎いふばかりなし。

おさんは、荒熊につひばみ去られて、山奥に入る事十町あまり、更に生きたる心地はせざれど、今はかうと思ひにければ、泣きも叫けばず、既にして、熊はおさんをかきおろして、喰はんともせず、恰も人の如く立ちて、胸のあたりより、皮をくるくるとひき捲くれるを見れば、熊と思ひしは四十余の人なりけり。よの常の女兒ならば、驚き恐れて足さへ立つまじけれど、おさんは絶えて恐れず、此の男は別人ならず、笠松平三なり。よりて懇に慰めて、決して御身を害する者にあらず、却りて御身を救はんためなり。その故はかやう〳〵と、半六に頼まれし、一伍一什を語りきかせて、彼の割符枝を證據に見せて、その僞りならぬを示し、若し今奈良へ歸り給はゞ、遂には命なかるべし。それよりは一身をうちまかせんとならば、直ちに京都へゐてのぼりて、養育すべし。御身が心いかにぞと問ひぬ。

嗚呼哀むべき此のおさん、薄命の餘に加ふるに、實に無殘暴戾の極を以て迫れり、天地の間一の依るべき者なく、只仇なりし平三の俠に依るより外、すべなき身とはなりぬ。誰か淚を彼が上に濺ぎて、半六が兇惡を憤らざらむ。今おさんのいふ處の言の、いかに悲しきかを味ふべし。

おさんは、ことのもとを聞きて、はじめてよゝと聲を立て、

涙あやなき袖のひまより、はふり落つるをかきのごひ、我が身いかなれば、過世の惡業ふかくして、母には三歳の年に別れ、父は非命に世を去り給ひ、生みの母とてもたのみてし、その人も身まかりて、今は一人の養親の、老いゆき給ふ後までも、反哺の孝を盡さんと、思ふかひなく思ひきや、殺さんとまでに憎まるゝ、何過のあら態に、たばかりさらし給はんとは、よしや御身のこゝろもて、命は助けらるゝとも、我身ありては養父のみか、半七どのゝ爲ならずと、聞きては五條へ歸りがたし、よるべなき身を憐みて、養ひとりて給はらば、千辛萬苦の世を經とも、親とし仕へて再生の、めぐみは化に思ひはべらじ、まだ幼き女の童が、ませたりと聞き給はんが、わが身にも又情願あり、齢さかりになるとても、遊女妾はいふも更なり、人の妻とはなりがたし、こは深き故ありて、命のをしきもその爲なれば、くはしうは後に申さめ、この一條だにうけ引き給はゞ、賤しき活業に世を渡るとも、いなみ侍らじ。………

平三之れを聞きて、大に嗟歎し、故なく承認し、その願を遂げんことを盟ひぬ。

………われ色をもて好まれば、年は四十に余れども妻を娶らず、同胞もなきにつけては、折ふしの病みわづらひに、老後の事おもへば心細かりしに、天この小女を賜はること、はからざる幸福なり。心安かれ、富貴の家より縁結ばんと云はすとも、御身が情願は破るまじ、………

其まゝ、平三はおさんを携へて、華路にのぼり、ちとのなりはひをして、年月をおくりしが、又おさんより精しき物語を聞きて、益々その至孝と、貞操の凡ならざるを感激し、且その薄命を憐み、いかにもしてその母にも、めぐりあはせんと心を盡しぬ。

その頃華路に、白拍子の流を汲める女に、笠屋夏とて、幸稚の舞に巧みなるがありけり。管領執事といへども、酒宴の席には、必ず此の夏を招きしほどに、おのづから衣食に富めり。笠松平三は、もと田樂の能をなせしものなれば、夏が家とも疎

からず、之によりておさんを彼が弟子として、舞を習はするに、僅か四五年にして、その技を極めたり。

……顔色の艶妖なるを猖みては、月も忽地雲に隠れ、姿の匂やかなるにけおされては、花も羞らふ風情なれば、人みな額に稱娑して、其の舞さへ却りて夏に勝れりといふ。

去程に平三は、彼が二八の春の頃より、彼を舞々に仕立て、夏が家號を名のらせ、世に勝るといふ心にて、笠屋三勝と名づけ、洛東祇園の社頭に於て、女樂を興行したりしに、見物の老若雲の如し。三勝は世の人に、面を見らるゝ事の、いと淺ましくはあれど、生みの母の割符の撥の因果にて、舞舞とありたれば、めぐりあふべきよすがには、ある事もあらんと見物の老女子に眼をくばりぬ。加之一日片時も、忘るゝひまのなきは、大和なる半七の事なりけり。

大和にて、一たび夫と定めてし、半七が事なつかしと、華洛へ上り給ふとも、互に年長け、稚顔うせて見忘れやし給はん、もし名告あふしるべにもと、半七が家の紋なる柏の葉に、大の字を錦の衣裳に縫はせしかば、世の人更に渾名して、大柏と呼びにけり。

而して半七は、おさんは遂に死せる者と思ひたりき。即ち窃に佛前に看經する者は、母の位牌と彼が位牌とありき。あはれ三勝の心盡を、夢にだに知るあらば、いかに嬉しからむ、その時果してありや否や、次をおひて趣味ます〳〵津々あり。

（以下次號）

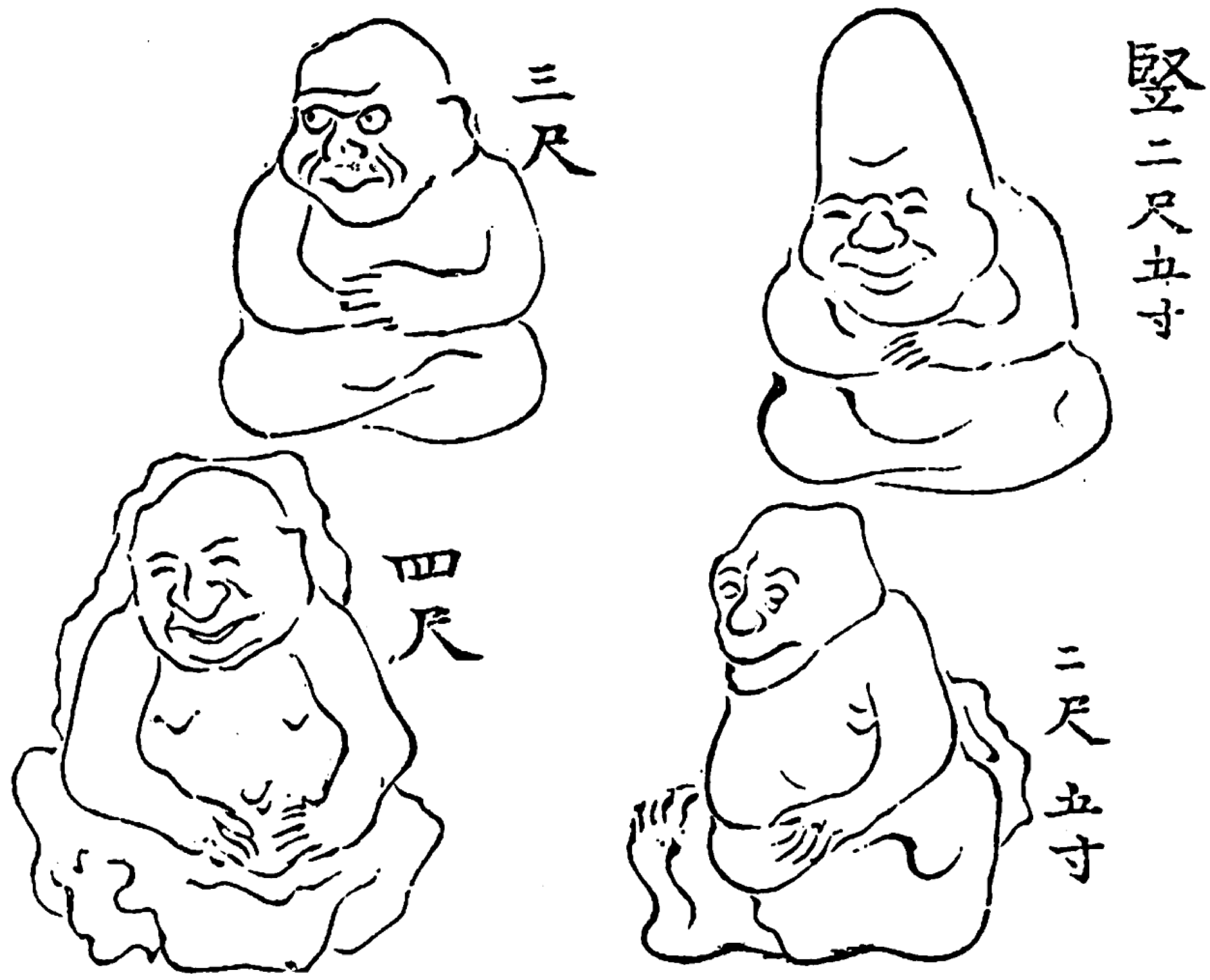
大和めぐり

井上頼文

吉備姫命墓

頼文いはく。此の御墓の垣内に、石人四體あり。

石像の略圖



内三體は、脊にも一面づゝありて兩面の像あり。又、二體は、膝の傍にも面貌あり。合せて數れば、四軀九面あり。いづれも異形怪異の面貌なり。おのれ幼き時、小房の古墳をさぐりたる折、よく見たる事ありき。里老の說に、この石像は、欽明天皇の阪合陵に、往古より四軀ならびたてりけるが、その面貌猿に似たるより、山王の御使はじめなりとて、土俗、山王權現とあがめ、此の石像に祈願すれば安產すとて、人々群集せりき。しかるに、文久三年の頃、御陵修繕の際、この異體なる石像を、いかの淫祀とや誤られけん、辻本善六と云ふ人の所有せる畑地に捨てられたり。よりて、有志の人々この石像をそこに据ゑ並べて、崇敬し、毎年、十一月五日、山王祭とて、祭りきたれりとぞ。この辻本氏が所有の畑地は、欽明天皇の御陵の、西南の方、二町ばかりへだゝりたる小

高き丘なるが、この岳より、石棺を掘り出したることありしが、近年に至りて、この岳を皇極天皇、孝德天皇の御母、吉備姫王、檜隈御墓と御治定あらせられたり。されど、此のたびは、この石像を他所にも移さず、また、もとの、欽明天皇の御陵にも歸し奉らず、おのづから吉備姫王の御墓のものとなれりきといふ。

賴文按ずるに、實に、千古の珍品にて、むかし、御陵の域内にたてたる、俳優人の石像なること疑なし。さるを、

大和名所圖會に、

元祿十五年十月五日、平田村、池石といふ所にして、堀出せし石像なり。面貌猿の面なりとて、堀出しの、山王權現と稱す、是、妄談俗說にして信ずるに足らず。同郡、高取山の奥、壺坂寺奥院に、五百羅漢の石像あり。これは、其の始

壺坂寺奥院の石像



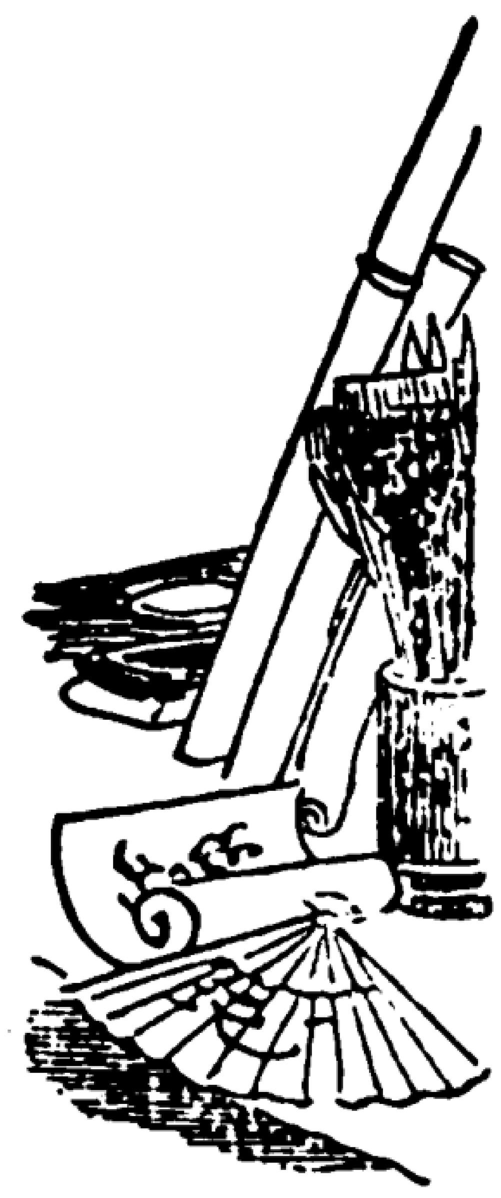
め、高取山に壘を城しとき、高山にて、大石運送に、人多く死す。故に石壘成就しがたし。數多の石工、これを歎き、壺坂の觀音に立願し、終に功を成せり。此、即ち、大悲擁護の力とて、其の願を滿しめんがため、數百の石工、各、一體二體を刻造し、巨巖の面に、羅漢を雕りたるもあり。然則、此の四軀も、其の時彫造せしもの必せり。但脊の方に、面貌あるは、初て造りかけしを指おき、石をとりなほし造るといへども、なほ、その意に叶はざるは、其の儘に打捨おきしものならん、よく〳〵石像を見るに、半造にして、悉く佛體成就のものにあらず、然るを、平田村池田の土中に久しく埋れありしを、元祿中穿出し、此の梅山にすゑおき、種々の因緣を傳ふるものならん。

とあるは、上古の事物をよくも見ざる眼もて、おしあてに臆斷せる妄説といふべし。なにごとも、すべて、實地につきて講究せざれば、机上の空論、たゝみ水練のそしりをまぬかるゝこと能はざるべし。いなひとり机上の空論のみにとゞまらず、大に世人をあやまらしむることなしといふべからず。注意すべきことなりかし。

かつ、高取山に壘をきづきし時、壺坂寺の奥の院に、五百羅漢の石像を雕りつけたる如くいへれど、これまた誤謬なり。慶長年中高取山築壘の時羅漢の像を作りし事もあるべけれど、この五百羅漢の像は、はやく奈良朝の時に作れる千古の遺物なり。されば、本居翁の玉勝間にも

俗に、羅漢としもいふは、あらぬことなり。よくみれば、みな、上つ代の人の形なり。神の御しわざと見えたりといへり。おのれ、いまだ見ざれども、誠にさぞあらむと覺ゆ。

といはれたり。證古家の説には、佛像の裝飾をよくも知らぬ石工が、奈良朝當時の人の服粧をうつして作れるものならんといへり。げに、多神社にます神像、阿波國一宮神社の神像、或は法隆寺の塑像等の頭部に類似せるを思へば、さもあるべきか。今尙古生が筆記せる壺坂寺奥院なる石像の圖をかゝげて、その一班をしめすべし。





御苑の菊

山岡螢雪

としへに民やすかれと祈るなる
　わが代をまもれ伊勢の皇太神

と、あやに畏こくも、今上陛下の、御仁慈に渡らせ玉ふの切なる、我が四千餘萬の青人草を、日夜ひたすら、憐れませ玉ふ、大御心の、彌や厚さ、實に宇宙の下、西に東に、はた南にも北にも、國てふ國は數多あれど、雲に聳ゆる高嶺、渺茫たる海原の廣大だに、例ふべくもあらぬ、御聖德を、日ねもす、終夜、仰ぎ

まつりつゝある、我等國民の如きものやある。

太古、神武帝の、そらにみつ大和の國、橿原の宮に、即位まし〳〵てより、年を經ること、殆三千年、連綿として、榮えにいや榮え、過ぎし、延喜、天暦の昔はさて、仁德の御代にも、彌やましし、明けき、大御代の惠あまねくも、茜さす、赤阪の御所に、かぐはしき菊の花の、はや十日の憾みあきにあらねど、床しふ咲き亂れたる。

頃はいにし、霜月廿四日といふの朝、かしこくも輦下に筆を走らせつる、草莽のわれ〳〵記者どもに、特に拜觀を許るさせ給ひたれば、己も、朝まだきより沐浴して、身を淨め衣服改めて、時計のまさに、午前九時を示すころ、紀の國阪下の御門につきぬれば、早や數輛の車の、轅を門前にあらべ居たりき。

やがて御門を入り、玆に參る上りたる人々すべて、四十餘名と共に、神谷宮內省調查課屬外一名の案內に導かれて、先づ、調馬所の前を過れど、いと黑く塗りたる、禁苑の內門ありて、ころをくゞれど、木竹路を夾み、行こと僅かにて、山あり池あり、松秀で楓燃へて、いとも清楚に、此の日金烏輝々として一天朗に、行路塵あがらず、風靜かにして、殊に長閑に、さながら神韻縹渺たる、別天地に入るの感ありき。

同行相顧て曰く、人口百三十餘萬の大都の內とは、得も思はれぬまで、雅趣掬すべき、好箇の風光仙境の美と、忽にして茶亭あり、僊錦閣と云ふ、其の下に蓮池と呼ぶ池あればにや、又の名を、蓮池の御茶屋と名づくとか。

一奩の池水淸うして、彼方に、架せられたる双橋、兩岸に參差たる、紅楓碧松の影など、的歷として逆にうつり、水底の小鱗、さながら、樹葉の間

に、戯れつゝ有るごとくに見ゆ。

萬代とかめのお山の松かげを
　うつして澄めるやどの池水

と、龜山帝の嘗て『松色水浮』てふ御題もて、詠ませ給ひしも、實にこゝの風情ありと、思ひ侍りぬ。

亭の後に葭簀張の、第一菊花壇ありて、二つに別れ、其の一つは、園丁保坂喜太郎氏の造られたる、牡丹咲きてふ、中輪菊にて、

玉簾	白鶴	玉津島	新月ノ色
嵯峨ノ奥	冲津波	雛玉章	（以上白之部）
君の惠	智仁勇	金峰山	黄昏
早稻ノ旭	三保ノ崎	菩薩ノ掌	（以上黄之部）
高御坐	朝日影	日の出	遙々
三千年	夜雨ノ月	千本櫻	（以上紅之部）

などを初めとして、百四十七種と、又の一つは、安井宗十郎てふ、園丁の造られたる、糸菊の稱ある、嵯峨菊にて、

月ノ富士	布引ノ瀧	十六夜
香雲	香雪	（以上白之部）
仙掌露	金孔雀	手引糸
宇治ノ里	玉垣	（以上黄之部）
江南ノ春	隅田川	燈明ノ光
乙女ノ舞	唐衣	（以上紅之部）

などを初め、五十三種あり。

それより、右に左に折れて行く程に、谷は皆池にて、山は松、櫻、椎など、亭々として、生ひ茂りたる中に、楓も少なからず、紅を滴らして衣裳を染めんとばかり、今を盛りに紅葉して、杜子の所謂、二月の花よりもと、思はれぬ。

後三條天皇の御製、

山雲秋後隔レ霜觸　野客朝來穿レ錦斟

更に、靈元天皇は、

秋後重來古洞ノ中　臺峰西脚野村ノ東

滿山一樣霜楓樹　蜀錦千株織得紅

と、御覽じ玉ひし當時を、思ひ侍りつゝ、聚芳亭に至れば、芳香忽ち鼻を撲ち來り、聲なくして花壇のあるを知らしめぬ。

此れぞ、第二の花壇にて、菊花の粹を拔きたる處、先づ、中輪菊花壇には、

比良ノ峰	佐野ノ渡	梨花ノ雪
雪の曙	瀧田鶴	（以上白之部）
秋ノ山路	黄寶山	佐保川
納言ノ響	金殿玉樓	（以上黄之部）
櫻の露	小夜衣	振分髮
つま琴	漁火	（以上紅之部）

あぜ、百二十八種、其の傍に、扇形の花壇ありて、こゝには、一本の根にて、數百輪を咲かしめける、三種あり、即ち、

緋威	（赤色）	一莖二百四十五輪
雲雀ノ床	（黄色）	一莖三百七十輪
白髮	（白色）	一莖二百五十二輪

此等は、園丁北村仙之助氏の、栽培せられし所と云ふ、次の花壇には、一本立大輪の菊六十四種を、いとも風雅かに、あや形に植ゑられ、よにも麗しく拜しまつりぬ。仍ち、

武藏野（柿）	銀世界（白）	眞葛ヶ原（薄赤）	大鳴戸（赤）
高卷繪（黄）	延年（黄）	金華山（樺）	龍門（樺）
沖津波（白）	家苞（赤）	初冠（赤）	薄雪（白）
國の遊（樺）	島の内（薄赤）	土佐ノ海（赤）	朝うるみ（櫻）
月の都（白）	金浦（樺）	黄金ノ渦（黄）	小旋風（赤）
國の月（白）	嵐山（櫻）	村しぐれ（黄）	勝鬨（赤）
常盤ノ雪（白）	君の薫（櫻）	月の傘（柿）	若紫（赤）
養老ノ瀧（白）	龜ノ尾山（黄）	南殿櫻（白）	二見浦（赤）
圓座（黄）	双白鶴（白）	初雁（赤）	春の曙（櫻）
紅葉ノ錦（樺）	紫の雲（赤）	鶴ノ巣籠（白）	錦の袖（赤）
柞の森（櫻）	花形見（赤）	翁の舞（白）	長[illegible]（藤）
園ノ育ち（黄）	來光ノ雲（赤）	香爐峰（白）	露ノ下染（黄）
嵯峨ノ秋（黄）	朝日波（赤）	御所櫻（櫻）	雲の遊（黄）
安宅ノ關（櫻）	ミセス瀧（黄）	白龍（白）	御代ノ香（赤）
からくに（黄）	龍ノ立浪（白）	弘徽殿（櫻）	園の秋（黄）
千古ノ雪（白）	さなせの瀧（白）	雙白鶴（白）	養老司（白）

これらの中、花輪のいと大なるは、武藏野にして一尺四寸餘、これに次ぐものは、若紫の一尺三寸五分、君の惠と養老司の、各一尺三寸、春の曙に双白鶴の、一尺二寸などにして、小さきといへど一尺を下らず、誠に言はん方なき、いとも妙なる花にこそ。

顧れば、傍に能くも、一莖數百の花を咲かしめたる大作あり、こは一本立大輪菊と共に、安井園丁の丹精を、盡しゝ者なりとか、其の名は、

雛鶴　(白色)　一莖三百七十七輪
金鷲　(黄色)　一莖七百十七輪
赤城　(赤色)　一莖八百輪

と、拜し看るもの、感嘆せざるはなし、又、接木物の花壇ありて、一株に五色の花を着け、人工の巧なる、實に驚くに餘りあり。されど御園の中央に咲き亂れたる、野菊も又却て、趣致愛すべきなり。

こゝは、先に、觀菊の御宴を開き給ひし所、芝生には、白布を張りて天井とし、杉葉のみどりに、菊と梅もどきなどを交へて、柱をつゝみたる、御假屋の、其の儘に殘り居れば、かしこくも、陛下の玉座まし〳〵たる所も、親しく伏おがみ、賤の身ながら、かゝる幸を蒙りたる、うれしさ、覺えず感涙にむせびぬ。　後醍醐帝は、嘗て、

百敷やわが九重の秋のきく
　こゝろの儘にをりてかざゝむ

と、のたまひしに、申すも畏こき事なから、先つ頃或外臣の、御苑を拜觀しまつるをり、陛下は月に幾回、鳳輦をこゝに臨ませ玉ふにやと問に、萬機多端にましませば、菊花の節ならでは、行幸なしと聞きまつり、深く嗟歎せしとか、たゞ、皇太子妃殿下は、日毎に玉歩を枉げて、清き秀色を愛でさせ玉ふと、漏れうけたまはりき。

あはれ、萬乘の玉尊をもて、御心の儘にも、みそな

はし玉はず、我ら同胞のために、切に、萬機に接し玉ふ、鴻恩の萬一ありとも、せめては、報いまつらでよかるべきか。

それより進で、虫喰門を潜れば、脚下に池ありて、青松紅楓の影を浸し、爛然として、錦の布を敷たるが如く、其の美云ふべからず、丘上に洗心亭あり、眺望最も佳。

歩を轉じて、亭の下を廻り、梅樹をもておほはれたる、寒香亭を過ぎれば、丸山の御茶屋に着きぬ。こゝに、第三菊花壇ありて、二に別れ一を中輪盤插造花壇とし、

上苑ノ月　秋の心　月の都　（以上白之部）
庭の雲　鳳凰擬　繰り返　（以上黄之部）
珠の錦　東都ノ花　深夜ノ燈　（以上赤之部）

などを初め五十種と、又、一つは中輪亂咲花壇として、

月下ノ波　扶桑峰　四湖ノ響　（以上白之部）
君が代　五柳門　岩躑躅　（以上黄之部）
雲の上　南殿ノ遊　美人觀　（以上赤之部）

など五十三種を栽ゆ。此の二壇は共に、園丁谷常伴造氏の、造られし處と云ふ。

以上の菊花は、云ふも更なり、名にし逢ふ園丁の我れ劣らじと、丹精を凝したるものあれば、いかでか尋常のものとは、たぐふべくもあらず。

いざ是れにて、菊花も拜觀し終れば、更に丸山を分け昇り、滿涯の霜葉を探らんと、こゝかしこをさまよひて、往古の奥州街道たりし、小高き處に至れば、官人教へて云ふやう、こは所謂一里塚の舊趾にて、中ば朽ちたる此の木は、千有餘年のものありと、夫れより少し辷りて、溪に下れば、彼方に公孫樹の大木、日光に輝きて、其の葉黄金の如く、又、此方には、西行法師がこゝに憩て、清水を掬ひたりと云ひ傳ふ、西行井ありて床しく、

坐に昔時の様も、思ひやられぬ。

かくて、溪氣森々として、秋情幽邃なる山路を辿り、楓を過ぎて松に入り、松樹楓林の間を縫うて、やゝ苑内を拜觀し終りたれば、再び調馬所の前に集り、心窃に、兩陛下を初めまつり、東宮兩殿下の聖壽萬歲を祝し奉り、同行諸子と相共に、禁苑を辭して、歸路につきぬ。

山秀で水清く、松風天籟を吹きて、君の八千代を奏する如く、奇芳仙馥四邊にあまねき、神韻縹渺たる御苑の風光は、素より之れのみにあらねども、詳しく寫すは、法の許さゞる處なれば、只萬分の一を記して、其の餘香を、讀者諸媛に頒つのみ。猶、菊花の因て來る處、いと古く、陳ぶべき事ども尠からざれば、他日又、詳しく記すの期あるべし。

この稿かき終りて、國風二首を得たり。仍ち、

大君の惠の露にさきにほふ
　菊は床しく花くらべせり

身にあまる君の惠を仰ぎつゝ
　御園の菊ををがみてし哉

しのぶ旅路（四）

永潛生

三十日

あかつきの鐘に夢を破りつ、曙光もおぼろげなる庭の面に立てる秋萩の、枝もたわゝに咲き匂ひつつ、置く白露も、こぼれんばかりなるが、池水に影を映じたるさま、目もさめん心地す。

　山里の萩のにしきはなか〳〵に
　　みやこの春におとらざりけり

清瀨に嗽ぎて合煇亭に詣つ。亭は、本寺の向ひな

る山の頂にあり。佛道大通兩禪師の像を祭る。燈を掲げて拜みまつるに、眼光さながら生けるが如し。山傳ひつゝゆく程、天津日影は、やう〳〵さしのぼりて、山はさながら、紫の色を帶びたるに、朝霧の幾重ともなく立ちわたしたる、讀經の聲かすかにして殘れる月の淸らなる影など見れば、須彌の山にも遊ぶに似たり。

朝ぼらけ山のかげ路をこえくれば
　天の八重雲あしもとにたつ

このあたり五百羅漢の石像をならぶ文化年中に成れるものゝよし。烏を見たるに、いかにも小さき樣覺えければ、尋ねけるに、是の山にはかの嚴島と仝じく、只だ、一つがひの烏棲めるのみと聞くもいといぶかし。

朝餉たうべて後ち、寶物など見る。めづらかなるもの多きが中に、文徵明の十六羅漢、東坡の墨竹、子昂の草書などすぐれてめでたし。愚中禪師の遺墨什器など、見るべきもの少なからず。わきて、目を驚かせしは、雪舟の畫幅にして、大小三十七幅の多きに及び、山のたゝずまひ水の趣きなへてのものに似ず。强き筆は鐵をも劈くべく、輕く筆は、薄の風になびくに似たり。父君は、いたくたゝへ玉ひて、三ツ四ツあらましを寫し取りぬ。

瀧見んとて出で立つ谿に沿ひて溯り行くに、水のさまいよ〳〵おもしろし。分け入る程、路二つにわかる。右を取りて進む。このあたり、一面の松林にて、顔の色さへ翠し。折々聞ゆる鳥の聲に、靜づけさ云はん方なし。岩に腰かけて息ふ。七草いと盛りなり。三頃の田を求めばやなど君父は給ふ。あはれこの望かなへ奉らん時は、いつぞ。行けどもゆけども瀑の見えぬに、若し路違へたるやとて引き返しつ。更に、左に取りて進むに、くさ

くさの樹茂り合ひて、風なきにいと涼し。瀑は近くにある樣にも覺えねば、見ずて返らんも興ならめとて踵をめぐらす。

山深みなく松かぜのきよければ
　たきの音にもまがひつるかな

午過ぎて、再び、竹の林に入りて笛を尋ねけるに、二時あまり馳せまはりて、やう〳〵、三本掘り得つ。七の賢き人にはえ逢はずて、尺八の笛を得たりなど笑ふ。あはれ、竹多きたけの中にも竹はなし。材ある人の天下に少なきは、うべも理にこそ。家に返りて後ち、父君の手づからものし玉ひしに、二本はそのひゞきすぐれてよし。思ひ出での爲めにとて、一を大通と名づけ、一つを含輝となづく。實に、此の笛は、呉竹の世に永く家に傳へまほしくこそ。

寺の維持法にとて、わさび植ゑてはなど、父上の勸め玉ひしに、住僧の君いたく悦びて、試みてみんなど云ふ、明年の休みには是非にと契りて出で立つ。鬼ならぬ御僧達は笑ひ玉ひしか。あらずか。

澗水滔々幽谷に鳴り　　涼風陣々蟬聲きよし
　老僧無心客を送るなく山川情あり永く我を止む

など日本流の詩を歌ひつゝゆく。本郷驛より滊車に乘りて廣島につきしは、午八時過ぐる頃なりき。兄君は臺灣にゆきて居玉はず。叔母君姉君の心おきなきもてなしに、足疲れも忘れつ。眠に就てのちも、きのふの水の音は、なほ、耳にありてひゞく。

あはれ、此度の紀行は、如何に樂しかりしよ。如何に面白かりしよ。日數も僅か二日を出でず、みちのりも只に十數里に過ぎざれども、滊船にて百里の海に浮び、滊車にて千里の山を越えしよりも、遙かにめでたく美はしき贈物をもて、我を富ませ

り、米山寺に土肥氏の跡を弔らひ、佛通寺に大通禪師の昔を懐ひしは、先つ年逝き玉ひし叔母君を忍び奉る心の緒にはあらずや。翠の山を見て、おのが心をけだかくし清き水に塵の腸を濯ぎ、あまつさへ、よき笛得て返りたるは、雪を經て香ばしき梅のかほりにはあらずや。こをしも忍ぶ旅路と名づけしは、只だに古を懐ふのみにはあらで、今より後の世ながく、けふの旅路の樂さをもしのばんとてなり。

旅のらくがき

明治三十二年熊本の旅舍にて　深山庵主人

(四)火の神祭

古き儀式の中には、昔の風俗のしのばれて、床しきも少からねど、又、往々、見るに堪へざる殘忍、或は淫猥なるもあり。移り行く世の姿にも從はで、多くは、昔の儘なる氏神の祭典に、此の弊殊におびたゝし。熊本の市を離るゝ二三里ばかりに、小天と呼ぶ村の火の神祭も、其の例にや數ふ可からん。神體と崇めいはふは、年を經し猩々とかや。贄數多そなへて、宵より、神の御前の廣庭に、生木多く取りつかねて、火を焚き、三坪四坪にひろげて、夜すがら鼕々たる太鼓の音と共に、火はいやさかりに燃ゆめり。夜明くれば、神樂嚴めしく又勇ましく奏でいれ、舞祝詞くさ／＼の式事あり。斯くて、神官は、甲斐々々しく袴の裾をからげ、神樂の音につれて、まだ、燃え殘る赫々たる火の中を、素足のまゝに走り渡ること兩三度、之にて、神事全く終れば、先の程より素裸にて控し、若者ども、此の時、鯨波の聲を作りて、押しつ寄せつ、火の中に入り、瞬くまに踏み消して、其の灰は、

煇足の藥とて、嘗めたる如く、跡も殘さず、皆、持ち歸るなり。かゝる騷にも火傷するものいといと稀なりと聞けど、如何に土と水との中に、練りに練りたる足とは云ひながら、生身の、火に燒けざることやある。神事とは云へ、亂暴も極まるとこそ云ふ可けれ。

琴平山の美趣

讃岐　小西甚之助

松間の霜葉、今や秋に醉ひ初め、象峯の鼻頭、正に淺紅を潮し來る。われ、亦、微醺を帶びて逍遙し、礎を降らんとすれば、清少納言の碑の邊、櫻のもぢみ葉、金風に舞ひて紅雪霏々たり。一帶の層樓小簾を卷くの才媛ありや無しや。住の江に見るらん高燈籠、墨の繪に見る如く、夕餉の烟白く刷きたる飯の山、飯の山盛見る樣に、いづれをかしきに、藍の花紅く、蕎麥の花白く、中を流るゝ祓川、塘の松青く、麓の霞紫なる間を漲る稻田、銀江彼に長く、金海是に廣し。梢高く鵙啼けば、鼓樓朗らけく鼕々の音高し。谷間幽かに泉鳴れば、樂殿さやかに洋々の聲す。是われが昨日琴平山に上りて得たる美趣。

本誌前號にかゝげたる、「汗のかれ」誤て、諸子の目を注ぎ玉ふ處となり、讀て誤植の箇處など、云ひこされし方の少からねば、左に正す。

(上)の卷に於て、

誤	正
クックツと獨せいだして	クックと獨せいだして
ほんとにさうよ虛言ではない	ほんとにさうよ虛言でない
たつた九百といへばいへ	たつた九百といはゞいへ

(中)の卷に於て、

誤	正
かのキリストも其の始め	かの天帝も其の始め

(下)の卷に於て、

誤	正
されどおいらが收容たる	されどおいらが收容たる

以上、あはれ誤植の多き、校正のつたなさ、切に讀者諸嬢に、謝しまつるになん。



文林

落葉入簾　東久世通禧

かせあらみ母屋の簾はおろしても
落葉のちりのつもるいたしき

池水鳥　高崎正風

池もせにいりみだれては遊べども
をしのつかひは離れさりけり

深更時雨　鍋島直大

此ころは夜更るほどにおとたかく
まどうちたゝくむら時雨かな

冬月　津軽承昭

難波かた霜にかれふすむらあしの
はうらもしろし冬の夜のつき

寒暁鐘　長谷信成

窓ちかく霜にさやきしくれたけの
よもあけかたの鐘ひゞくなり

竹霰　宮地厳夫

しけりあふ軒はの竹にたはしりて
窓にちりくるたまあられかな

山家落葉　北郷久政

木枯の風ふきあれてやまさとの
かきねを埋む木々のもみち葉

寒夜衾　小出粲

みしろけは動く床まのあひたにも
寒き夜かせのふくこゝちして

枯野霜　坂正臣

あさ霜やとけ渡るらん野へのくさ
枯なからこそうるはひにけれ

庭落葉　植松有經

木からしの吹たゆみても山かけの
にはのもみち葉庭にちりける

野逕霜　近衛貞子

もみち葉はみな散はてゝ霜はかり
置きそはりゆく野への細みち

寒松　鍋島榮子

紅葉みなさそひつくしてわか山の
まつにのみふくこからしの風

海眺望　前田朗子

沖遠きはなれこしまとれもひしは
波にたゝよふ雲にそありける

寒樹風　西四辻茂子

葉かへせぬ椎のこすゑの木枯は
いつまでとてかふき渡るらん

冬川　柳原愛子

木葉みなそこにしつみてたに川の
みつのいろこそ寒くみえけれ

社頭杉　岩崎寧子

いつのよにはふりか植し苗ならん
まかきの杉のくもにそひゆる

社頭冬月　小池道子

霜枯もしらぬいかきのさかき葉に
てるかけしろし冬の夜のつき

落葉深　小川直子

やり水もつもる落葉にせかれつゝ
庭にあふるゝふゆのこのころ

冬月寒　松平淑子

冴えわたる月のひかりにいとゝしく
寒さみにしむふゆの夜半かな

庭霰　鶴久子

ふみ石の上をはしりてしはらくは

苔路にたまるたまあられかな

菊の色々

讃岐　小西甚之助

白菊

影寒き月の光に色さえて
霜よりも猶しらきくの花

黄菊

群れて咲く黄菊の花をふく風に
匂ふこかねのさゝ波そ立つ

赤菊

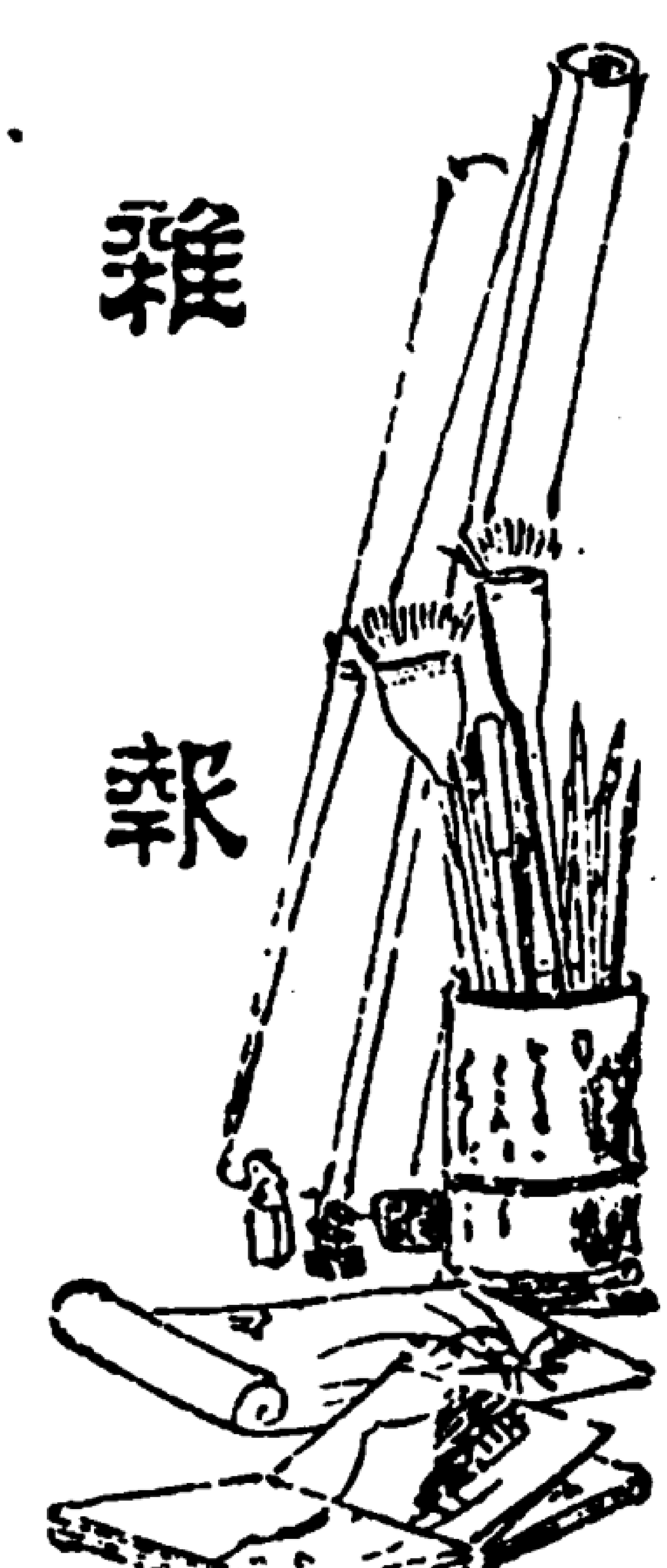
朝日照る籬のあけの菊の花
秋の哀はいつちこえけん

紫菊

殊更に時をえかほに匂ふ哉
秋の色あるむらさきの菊

白菊化紅

朝日影そむやしら菊ひと日こと
うすくれあゐに色のありゆく



雜報

●梨本宮御成婚式　梨本陸軍中尉宮守正王殿下には、十一月二十八日の吉辰を卜させられ、宮中顧問官、貴族院議員、正二位勳一等侯爵鍋島直大氏、令孃伊都子姫と、御結婚の大禮を擧げさせらるゝに付き、午前七時と申すに、御迎へとして、同宮家令、日高秩父氏、大禮服帶勳の正裝にて、妃殿下御列の御馬車を率ゐ、永田町なる鍋島邸に參向したり。同邸にては、朝來諸般の準備整頓し、

日高家令の着邸するや、侯爵夫妻、從四位(直映)夫妻を始め、家令家扶等、玄關に迎へ、直に、對面所に案内し、間もなく、姫に會見し、畢て、茶菓の饗應を受け、姫の御着裝を待上げしに、姫には、御用掛櫻井柳子、(豫備海軍機關大監櫻井省三氏夫人)外、御附婦人數名に扶られ、五衣を召せらる。頭飾は、金色の釵子と、金粉地の櫛を用ひられ、唐衣、(蘇芳二重織龜甲の地)表衣、(二重織)五衣、(蘇芳)引陪木、(紅)御單、(靑)下に、深紅の打袴を、穿たせられ、檜扇を持たせられたり。八時、總ての用意調ひたるを以て、姫は、櫻井御用掛陪乘、先驅警部二騎、次に、近衛騎兵四騎、次に、御馬車、次に、日高家令馬車、次に、騎兵四騎の順序にて、鍋島邸を出で、賢所候所へ御着、又、一番町宮御本邸にては、同八時と云ふに、王殿下には、束帶を召させられ、垂纓の御冠、黄丹の御袍、蘇芳の御下襲小葵の袙紅葉菱の單に白浮織の御袴、下に紅精巧の大口を穿ち、裾を垂れさせられ、御列は、近衛騎兵半小隊、警部二騎先驅し、次に騎兵四騎、次に、王殿下御馬車、次に隨員伊藤式部主事、馬車、次に騎兵四騎の順序にて、賢所御通用門に、御着あらせられたり。

賢所大前にては、早旦より、御殿の粧飾を爲し、大眞賢木を樹て、式部職官員着床、同三十分、王同妃兩殿下、賢所候所に參入、同時に、當日參列の閑院宮載仁親王、同妃、山階宮菊麿王、同妃、久邇宮邦彥王、同妃、各殿下を始め奉り、宮内官、幷に、鍋島正二位、同夫人、鍋島從四位、同夫人等、幄舍に參進着床、間もなく賢所、皇靈殿、親殿を開扉、(此間奏樂)掌典等、神饌及び御幣物を供し、(此間奏樂)岩倉掌典長祝詞を奏し、訖つて、王同妃賢所拜禮、親しく御告文を奏

し、神酒拜受の儀あり、再び拜禮(此の時遙かに青山練兵場に於て陸軍禮砲の音を聞けり)王同妃、皇靈殿神殿の拜禮を訖り、候所に退下、引續き御幣物神饌を撤し(此間奏樂)御閉扉(此間奏樂)各ゝ退出せられ、此に目出度、全く、賢所大前の御成婚式を、終らせられたり。

同時に、宮家扶富田信敬氏は、青山御邸に參向、御先代、故守脩親王御靈殿に、神饌を献備し、拜禮後、退下せり。賢所大前の御式は、全く、九時を以て終り、兩殿下御同車、一番町御本邸へ御歸着相成りたり。

御本邸御歸着の後、兩殿下には、樓上に揭げ奉りたる、御先代、守脩親王殿下の御寫眞、御拜あらせられ、畢て、同十時より、御廣間に於て、兩殿下供膳の式あり、引續き、御近親、久邇宮邦彦王殿下に、御對面、御盃の儀あり、間もなく御媒妁田中宮內大臣、鍋島侯其他の祝賀を受けさせられ、御庭前に於て、王殿下は御束帶、妃殿下は御五衣にて、御撮影あらせられたりと承る。

天皇陛下には、午後一時、勅使として、侍從侯爵廣幡忠朝氏を遣はされ、左の品々を賜りたる由、

一御樽　一臺　　一御肴　一臺

一紅白縮緬　各一匹

尙、皇后陛下よりも御使として、小池權掌侍を遣はされ、左の御品を賜りたり。

一白羽二重　二匹

皇太子同妃兩殿下にも、御使として、大迫東宮侍從を遣はされ、御祝儀を贈らせられたるやに伺へり。

軈て御朝見として、午後二時、王殿下には、陸軍中尉の御正裝に、旭日大綬章を佩はさせられ、妃殿下には、大禮服マント、ド、クールを召させられ、御同乘、御參內あらせらる、先驅警部二名、

次に近衛騎兵四騎、次に妃殿下王殿下御同乘御馬車、次に櫻井御用掛馬車、次に日高家令馬車、次に近衛騎兵四騎の順序にて、夫より、桐の間に入らせられ、式部長の奏請に依り、天皇皇后兩陛下、鳳凰の間に出御、守正王同妃兩殿下にも、同所に進み、御對面御餅を給ひ、皇后陛下は、同妃殿下に對せられ、勳二等寶冠章を、御授與相成り、畢て、兩殿下には、再び、桐の間に入らせられ、暫時御休憩、同四時御參内の節は、御同列にて、宮城正門より馬場先門を過ぎ、芝離宮へ成らせられたり。

同離宮にては、七時より、閑院宮載仁親王、同妃、山階宮菊磨王、同妃、華頂宮博恭王、同妃、久邇宮邦彦王各殿下を、御招待、御祝宴を開かせられ、鍋島侯、同夫人幷に、宮内官等、三十五名に御陪食仰付られ、何れも、王同妃兩殿下の、萬歲を祝し奉りしと承る。

兩殿下には、午後七時より、芝離宮御晚餐に、臨ませられたる後、同夜九時頃、御歸邸あらせられ、引續き、華族中の夫妻揃へる高齡者ある、高辻東宮侍從長、夫妻の調進に係る、三日夜餅の御儀式を行はせられたる由。

●有栖川宮の銅像 は兼て、大熊氏廣氏の擔任にて、砲兵工廠内に製作中あるが、爾來、大に歩を進めたれど、何樣、並大體のものあらねば、思ふが如くには圖どらず、來春よりは、石膏にかゝり、夫より、蠟鑄を施す順序あれば、何れ、明後年に至らざれば、落成せざるべしと。

●水戸義公祭典 十二月三日紅葉館に於て、水戸義公の祭典、幷に、野史臺十五周年紀を、執行せられ、午後二時より、靖國神社宮司主任にて、祭典を行ひ、三時より、大隈伯其他の史談あり、

五時より、祝宴會を開かせられたり。

●帝國東洋學會　常盤井堯猷氏、外二十餘名發起となりて、組織せる同會は、東洋諸國に於ける、言語、文學、宗教、哲學、歷史、地理、神話、俗話、工藝、美術等に關する事實を、現存の文書に依り、攻究するを目的とし、內、藏經の內容を攻究して、諸般の材料を查定類聚し、外、異譯の諸聖典を、對照考覈し、其結果を、編纂大成して以て、之が、第一段と爲さんとするものにて、事業の豫定左の如し。

(一)印度百科叢書編纂(二)字書編纂(三)論文出版(四)原本調查(五)典籍出版(六)原譯比較研究(七)質疑應答(八)日本佛教學會組織

●東海道鐵道乘客待遇改良　官設鐵道の改良刷新は、常に、他の私設鐵道に先せられしが、今度は、他に促がされて、漸次着手する所あり、寢臺車は、既に成り、食堂列車聯結も、亦、近日實行に內定せし由、猶は、從來東海道夜行列車には、一列車每に、一名の保護車長なる者を乘込まし、掏摸、盜賊の橫行を監視せしめしが、此の保護車長は、警察權を準用すること能はざるが爲め、其の効多からず、寧ろ、山陽鐵道の如く、一列車に、四五名のボーイを乘組ましめ、旅客の身邊、荷物等を監視せしむると同時に、亦、その所用を便せしむるを可とすとの議あり。其筋にて內議中なりといふ。

●弘濟丸醫長の名譽　大阪高麗橋吉田病院長、吉田顯三氏は、北清事件起り、赤十字社にて病院船を派遣するに當り、無給にて、弘濟丸醫長の任に當りたるが、今度、解除に際し、特別社員として、有功章を贈與したる上、小松總裁宮殿下の御邸に召され、晩餐を賜はり、席上弘濟と大書したる布に、左の如き附記あるものを下賜されたり。

吉田顯三芳志爲日本赤十字社病院船弘濟丸醫長奏功因書以贈

明治三十三年十一月　大勳位　彰仁親王

●腦力永續法　學者文人政治家の如く、主として、腦髓を働かすものが、如何にせば、其腦力に勞疲を來すこと少くして、多く事務に堪へらるべきやとは、衛生家、及び、體育家の間に、いろいろと説あることなるが、此程、米國のリランド氏と云へる人が、述ぶる處によれば、先づ第一、朝起の時間を、六時なり、五時なりに確定することなり。これは、同氏の工夫を經ざれども、昔より知れ渡りたることなるが、扨て、同氏の新案を云ふものは、夜寢る前に、明日爲すべきことを心中に決定し置くことなり。然らば、起き出で、事に當るに、意志が恰も、睡眠術によりて左右せらるゝが如くに、能く、一定の方向に運轉して、事務は運び易く、從つて、腦力も疲勞すること尠しと、

此は、同氏の實驗に基きたるものなりといふ。

●母親と嬰兒

▲牛乳のこと　牛乳と云へば、コーヒーに入れるんでも、乳兒に與るのでも、同じ樣に思つて居る方が、あるかも知れませんが、大違ひです。コーヒー等に入れて、大人が、通例用ゐる乳は、普通の飼養法の、牛で差支ないですが、乳兒の爲には、青草を食つた牛の乳は、危險です。佛蘭西あたりでも、子供用の乳を賣る、牛乳店と云ふのは、極く少ないですで、（年中枯草で養つた牛乳）日本で、斯う云ふ店がありますか、何うか、私は、未だ聞きませんでした。

▲コンデンスミルク　其上腐敗りやすい、憂もありますし、夏分などは、牛乳よりもコンデンスミルクを用ゐる方が、安心です。然れども、また、コンデンスミルクにも、種類が澤山ある、何が宜

いでせうと、度々母親さん方のお尋ねに、出會ひますから、出來る丈、大學でも試驗して見ましたが、亞米利加の、鷲じるしが一番好いです。次には、彩色のある、人形のしるしです。彩色のない婦人の、かいてあるものなんぞは、恐らく、バタを造つた、かすででもありませう。殆ど脂肪分はないのです。殊に、太い金すじ標の、ミルクなんぞは、子供に、吐瀉を催さしめた例など、澤山あります。米國の、鷲じるしには、贋が多いですが、なかなか澤山ありますので、見別が六ケ敷い。近來などは、鑵の上に貼てある紙を、そのまゝ、はがして、粗製のものに、貼用する樣にまでなりましたから、油斷がならぬです。先つ、龜屋とか、後藤とか、その外、信用のある店で、あめりかの鷲じるしと、堅く云つてお求めになるのが、近道でせう。此頃、大學にブリツキ屋が、入院しまして、其話によると、米國出來のブリツキは極く軟かいナイフでも切れますが、日本出來のは、錐でゝも突廻さんと、容易に開られぬと云ひましたが、專門丈に、成程よい所に、目をつけて居ります。

△乳の粉　乳の粉は、乳兒の營養を托する程の、養を有つて居るものではありませんです。

△乳を與へる時間　乳を與へる時間は、嬰兒には、凡そ、二時間置きと云ふのですが、夫も、母親の乳ならば、少しは早くつても、遲れても、大した恐はないですが、牛乳は、消化難いので、時間を嚴重にしませんと、嬰兒の胃を惡くします。

△正しい習慣　夜は十一時頃から、四時頃までは、乳をやらぬ樣に、七夜の中から、正しい習慣を、おつけになる事は、母親の、安眠健康のためにも、種々の利益があります。

▲乳を煮る器械　乳を煮るのに、寒い時には、通例の鍋抔でも、先づ差支ないですが、暑さに向いて來ると、夫が、大邊に危險です、夫て、是頃、その方面の人々か、工夫に成つた、乳を煮る道具は、淡路町の、後藤抔に賣つて居りますか、器械の搆造は、鐵葉の罐に入て、火にかける樣に、出來て居て、針金で以て、牛乳を入れた、小瓶を幾か吊り下る樣になつて居るので、小瓶には、護謨のキッチリした、蓋が出來て居ります。乳は、恰度、小瓶の肩の所まで、入れて置くので、罐の水が、煮立つて、乳も充分に煮て來ると、量が增して、口元まで、一杯になります。それを取出して、冷して置くと、また元の通、肩の邊まで下つて來る。すると、護謨の蓋も、一所に、瓶の口の中に、吸ひ込まれて、乳に少しの空氣をも、觸れさせぬ樣に、密着するので、此瓶に入れて置きますと、夏でも、永い間、安全に取置きが出來るのです。

▲食物を與へる順序　嬰兒が、生後七八ヶ月になりますと、乳の外に、食慾を生じまして、母親の食膳に、邪魔をすると云ふ樣になる。其頃に、何を一番先きに與へるかと、申ますなら、肉類のソップです、それに、ホンの少し、御飯を混入て、始めはやるのですか、段々、嬰兒の食慾の度につれて、御飯を多くして、後には、雜炊の樣に致します。それも、母樣の目の前で、食べさせ樣と致しますと、嬰兒は、ツイ、慣れぬ食方が、面倒になりますので、母親の懷に、逃れ樣としますから、可成、母親の居らぬ部室で、別の人に、その役目を云ひつけるのです。（報知新聞）

●日本女學校第二回茶話會　十一月廿一日第二回、即ち、二年生の茶話會がござりまし

た。會場を縫裁教室にせられましたために、体裁といへ、諸般の整理にも都合よさゝうに見うけられました。生徒諸嬢の談話も、至極簡單でよろしうござりましたが、諸先生方の談話は、殊に、有益な談でござりました。それより茶菓の出ました時に、彈箏がござりましたが、それは二年生だけに、前回のよりも、「お上手かと聞かれましたれど、その方には心得ある姿ゆゑ、如何であらう。後で、福引の餘興、大層おもしろかったさうでしたが、他に御約束がござりました爲、遂、はやく、御暇をいたしまして、殘念でござりました。この次の會には如何な御趣向がござりませう。これのみ、樂にいたしてをります。（なほ子記）

三十四年一月五日歌文兼題

歌　新年

文　うれしきこと

十二月十三日〆切



十二月五日兼題

殘菊

天 相摸國鎌倉郡戸塚町 伊豫田ふく子

冬がれの世をしらぎくのおのれのみ
　しもにほこりてさきのこるかな

地 三河國寶飯郡下地町 永井さい子

いろも香もかはらでたてるしらぎくの
　すがたもさむししもがれのやど

人 甲府市山田町 名取正代子

おく霜にみさをのほどはあらはれて
　いよ〱しろししらぎくのはな

（以下原稿到着順）

なゞ月ほうれしかりけり咲きそめて
　千代もこきくのはなのにほひに　松尾やそ子

かみな月なほ咲きにほふきくのはな
　しもにもまけずふゆもかれずて　輕部蕗子

おく霜のなかにものこるしらきくは
　はつはなよりもめづらしきかな　佐藤保子

かなしげに殘るもわびしくもがれの
　くさばかくれにしらきくのはな　高田菊子

朝な〱しもにほこりてあはれ世の
　うきしらきくはさきのこりつゝ　田代艶子

おく霜さいろあらそへるこゝちにて
　さきものこるかしらきくのはな　田代綾子

落葉つもるにはにも秋のいろ見えて
　かきのひなたにのこるしらきく　仁保しま子

霜がれてのこるまがきのきく見れば
　まだくれはてぬあきはありけり　平野琴柱子

白きくのしもにかはれるいろいろは
　ふたたびはなのさかりさやみん　德永則子

おく霜ににほひをそへてにはの面の
　きくのかをれはかはらざりけり　吉富彦子

あはれさを垣根にみゆるしらきくの
　はなのうらみはしもにこそあれ　高野眞子

しづがやの垣ねに千代のかをしめて
　しものふるよもしらきくのはな　志方文子

老が身のさもこそなれにはの面に
　おきなさびゆくしらきくのはな　森川儀子

千代の色をみせてうつらふきせ綿に　仁保基子

菊の庭

しものはなさくにはのしらぎく

冬かれしまがきにのこるひともとの　吉弘周子
きくのいろ香はあきにまさりて

くさはみなかれて霜ふるふゆの日に　中川芳尾子
うつろひながらのこるしらぎく

白きくのしもをしのぎて咲きのこる　辻さみ子
みさをはまつもおよはさるなん

霜はおきもみぢちりしくにはのもに　金山ゆき子
いろだにあせずかをるしらぎく

いさゞしくにほひもたかく覺ゆなり　平野文子
おくれてさきしませのしらぎく

くれてゆく秋のかた身さしもなから　竹村竹里子
かをるもゆかししらぎくのはな

冬かけてにほふもうれしわかやどの　久野春子
ひとめもかれぬしらきくのはな

大かたはひとめもくさもかるゝよに　久野久和子
のこるは千代のしらきくのはな

秋にたにとはれさりつるやまさとの　久野蝶子
きくはいつまでさきのこるらむ

みやこびといつか來てみむ山さとの　久野しやう子
かきねにのこるしらきくのはな

むらさきにそめかへしつゝ玉くしげ　川島さく子
ふたゝびにほふしらきくのはな

いつまでかまかきに秋のゝこるらむ　鈴木よし子
きのふのまゝににほふしらぎく

うつろはぬいろものこりておく霜の　名取よし子
うへさへにほふしらきくのはな

松かげに千とせのいろもうつろはで　山田よれ子
ひともとのこるしらぎくのはな

霜をおきて色もかはらすにほふなり　戸賀崎治子
ふゆてふこともしらぎくのはな

おく霜にみさをのいろそあらはるゝ　高橋松江子
まがきにのこるしらきくのはな

くさ枯のふゆまで見よとしらきくは　福原菫子
しもゝ一つに咲きのこりけり

おく露にいろそめかへてにはのおもの　御巫富士子
あわれをそふるしらきくのはな

うつろはぬ菊のいろ香はしきしまの　生田目英翠子
やまとをとめのすがたなるらし

八十菊のはなはあへなくちりはてし　有川壽惠子
さびしきのへにのこるしらきく

咲きのこる秋もやつれてしらきくも　田村多豆子
しもにはおのがいろなかりけり

冬かけてなほさきのこるきくの香に　山田辰子
たちまさるへきはなのなきかな

あらしにもしほまて殘る菊もあるを　村上操子
まつかしはのみなにゝいふらむ

冬きてものこれるきくはわかにはの　上原信子
しものはなをもけちてさくらむ

つゆしもに色もかはらできくのはな　佐野みさ子
ふゆをもよそにさきにほひけり

百くさはさひしきまでにしもかるゝ　佐野きやう子
ふゆにもたへてにほふしらきく

ふゆかれのはなゝき庭にさきいてゝ　毛馬内優子

しもにゝほへるきくそねならぬ
　九重のまかきにのこるきくのはな　牧　継子
きみかちよ世をいはふなるらん
　秋ふけてさふひさもなきむさし野に　關　勝子
ひさり咲きけむ菊のはなあはれ
　冬かれし尾はなかそてにかくろひて　山田祐子
またうつろはぬきくのひさもさ
　わか宿のかれしまかきにいろ見ねて　山田順子
のこるもさびしきくのひさもさ
　一もさのまかきに咲けるしらきくを　小山玉子
くれゆくあきのかたみさや見む
　呉たけをつゐさたのみてさきのころ　佐野鶴子
きくのはなこそ千代のいろなれ
　はつ霜にかさねてにほふしらきくの　青木たま子
まがきにのみそあきそのこれる
　もみぢ葉もゝひには露に散りしきし　松尾くに子
にはにのこれるしらぎくのはな
　もみぢ葉もさそはれはてし庭の面に　黒川節子
さびしくかをるきくのひさもさ
　うつりゆくいろのみ露のへたてつゝ　椎野ぬき子
にほひはそてにかよふしらきく
　うつろひてのころ花こそあわれなれ　椎野秀子
あきもすゑのににほふしらきく
　もゝくさもはやかれはてしあきの野を　椎野薫子
ひさりよそめにしらきくのはな
　はつしもにうつらふ色のうつもれて　椎野きよ子
さかりさやみんにはのしらきく

ひさもさきくの咲きのこりけり
　草はみなかれたるにはにふゆもなほ　清水益子
ふゆをかけてやさきのこるらむ
　あきくさのつきぬなこりさ菊のはな　永井廣子
ひさりにほへるしらきくのはな
　しづか屋のあれしまがきに千代こめて　坂本光子
のこるもあはれきくのひさもさ
　くさも木もうつろひはてしにはの面に　阪本榮子
をりあはれなるしらきくのはな
　人目さへ枯れしまかきににほふかな　日高かず子
かき根ににほふしらざくのはな
　冬きてもまださかりなり我がやどの　寺本いし子
またあたらしくきくさきにけり
　移ろびしあきのさがのにきてみれば　日高小君子
きくこそはなのさきはなるらめ
　うつろひし後にもちよのいろみゆる　山本龍子
ひさりさきめくませのしらきく
　こさ草はうつろひはてしませの中に　河田いし子
ななしさかれぬたきくのいろ
　露しもにはたあめかせにいたはりし　宮崎糸子
しもにもかれすにほふきくかな
　木ゝのははちりつくしたる庭のおもに　持地桃枝子
きくこそ千代のすかたなりけれ
　八千草のかれしかきれにさきのころ　草賀菊野子
のこしてかをるしらきくのはな
　紅葉ちるそのふにひさりあきの色を　杉山久子
　霜かれしかきねににほふしらきくや　草賀つう子

ことしのはなのなこりなるらん

のこりなくはきも紅葉もちりはてゝ
ほこりかほなるしらきくのはな
山田さと子

しもかれしをはなか袖にうつりかの
わつかにのこるしらきくのはな
牧野きえ子

にはの面のはきも尾はなも霜かれて
ひとりにほへるしらきくのはな
早川のぶえ子

千代をふるまかきの竹につゑつきて
しもをいたゝくしらきくのはな
古瀬りく子

おくしもにおきなさひゆく白きくの
ちよのいろかはなほのこりけり
長澤いゑ子

霜かれのあれしかきねにきくのはな
ひともとのころあきそさひしき
梅村花子

しら菊のさきのこらすはあきはてし
にはのなかめもさひしからまし
梅村玉子

八千草はうつろひはてしふゆの野に
にほひのこれるしらきくのはな
北島功子

おく霜にいろをかへたるむらさきの
きくのひともとおきなさひせり
北島松子

くれて行く秋のかたみのきくのはな
さよのかほりはいまものこりて
北島操子

しらぎくのかほりもたかき一もとは
さかりひさしくさきのこりけり
荒井滿武子

草ばなはみだれちりゆくそのなかに
いろだにかへずのころきくかな
三輪和賀子

袖がきにさかりひさしく香もたかく
しもにもまけずのころきくかな
荒井美和子

うゑし時はなまちとほにおもひしか
はやのこりしは一ともとのきく
荒井千代子

やち草は枯れてさひしきはがやとの
まがきにのころきくのひともと
駒澤まつ子

霜かれてなかめさひしきにはのおもに
ひともとのころしらきくの花
竹村貞子

おほかたのけしきは冬になりぬれと
かきねにのころあきのしらきく
森このゑ子

おきまとふ霜のかきれにさひしくも
ひともとのころしらぎくのはな
山崎かめよ子

冬かれのさひしき野邊にきてみれは
ひともとのころきくもありけり
三木ふさ子

みれば又あきのあはれのおもかげも
のこりてにほふしらきくのはな
藤倉ゑい子

むら消のゆきかとみえてふゆの野に
にほひみちたるしらきくのはな
服部倫子

もみぢちる庭のしらきくおくしもに
かをるもとむしにはのしらきく
友永章子

むらさきにゝほへる上のはつしもは
あきにおくれしきくのひともと
徳永萬壽子

おく霜をしのぎていまもうるはしく
さきのこりたるしらきくのはな
徳永庸子

つゆ霜にかれしまがきのしらぎくは
あきにおとらぬむらさきのはな
那須國子

露はしもとかはれど殘るきくなれば
日かずのほかのあきをみるかな
黒田明子

ちりつもるもみぢの中にめづらしく
虎口實子

くれゆきし秋のかたみさみねにけり　しづがかきねにのこるしらきく　佐々小琴子

ませの菊しもながざしてのこりけり　かきねにのこるきくのひさもさ　佐々有鄰子

いろいろの千草のはなにおくれつゝ　あきの名ごりをみするなるらん　澤田春子

庭の面にしもにもかれぬひさもさは　あきなのこせるにはのしらきく　溝口貞子

草もきもうつろふにはにあきの色を　あきなのこすかしらきくのはな　鏡山增代子

よのつれの花はちりにしにはのもに　のこしてにほふしらきくのはな　武田龜子

朝なあさな置くつゆしもにいろあせず　ほこりがほにものこるきくかな　松尾せい子

こゝろありてのころ垣根のきくのはな　にほふもあはれしらぎくのはな　松尾富美子

朝しものむら〳〵おけはきくのはな　しもながされてなほにほひけり　片山あや子

冬かれの野邊もにほひて目につくは　またさきそへしいろかさも見ゆ　鈴木かれ子

暮れて行く秋のかたみのいろ見せて　ひさもさのころしらきくのはな　杉浦いさ子

冬かれのしものかきねにさきのころ　のころもうれししらきくのはな　平尾あさ子

谷かげはしもさへおそくしらきくの　きくは千させのかさしなりけり　川村こう子

あきよりのちそいろに出にける

さきのころ秋の野すゑのしらきくは　はつはなよりもめつらしきかな　宮田けい子

人めさへかれふすのへのなかにしも　あきのなこりにゝほふしらきく　萩原章子

朝ごさにおきまごはせろしもなさへ　あはれよそげにさけるしらきく　岡本萬乃子

世の秋におくれて咲けるきくこそは　千代までにほふこゝろなるらめ　岡本松野子

ひさ目さへ草さへかれしにはのもに　のこれるきくのめづらしきかな　貝原八重野子

霜なおびいろもあせずて咲きのころ　みさなゆかしきしらきくのはな　秋山よし子

むらさきに色ゝつろひしきくのうへに　ふたゝひしろくむすふしもかな　金原玉城子

あさしものおきな草さはなりぬれご　はなのかなりはおいさしもなし　鍋田龍子

秋くれてちくさのはなはのこられご　かはらでのころにはのきくかな　縣靜子

霜おけはうへなきいろにそめてけり　きくはよはひのなかきのみかは　三宅中枝子

冬のきてよな〳〵霜のおきなくさ　いたゞきしろくなりにけるかな　河合縫子

ふゆふかきしもにもかれぬきくの花　ちよなこめてやさきにほふらん　服部萬子

おく霜にあへずかれゆくくさむらに　ひさりいろそふしらきくのはな　服部正子

もみち葉はちりてのこらぬ庭のおもに　加藤靜子

おく霜もしくれもいまはよそにみて
　ひさりあはれをしめしきくかな　野中朝子

めつらしく見めでられけり霜かれの
　ふゆかれしらぬませのしらきく　山崎千代子

冬かれのしものかきねにさきのこる
　ふゆ野にのこるしらぎくのはな　野村さく子

おほかたの秋におくれしゝらきくは
　きくは千とせのかたみなるらむ　木村好子

まことにも千代もこもれり霜かれの
　しものはなかさあやまたれけり　友澤しつ子

紅葉ばはこずゑまばらになりぬるに
　くさ葉のなかにのこるしらぎく　升田鶴子

しもしろきまかきにひさり菊のはな
　わりなくのころあきのしらきく
　ふゆかれしらて咲きにほふかな　高石登代子

十二月五日兼題

歳月不待人云ふ語を讀みて

石見國邑智郡田所村　寺本いし子

光陰は流るゝ水よりも早しと。げに、ことわりありや。弓の矢の如く、ひまゆく駒のあしをはやみ、今年ものこりすくなくありぬ。あはれ、今年學ばずして、來年ありと云れまじきに、何事しつゝ此のひとゝせをすぐしけん。思ひしふしも多からざりしを。何一つ、これぞと云ふべき、いさをもえたてず、日情しきかぎりにこそ。住の江によるゝ年なみを數へ見れば、廿とせあまりて三つ四つ。我が世も、あかばすぎはてけり。春は花に浮れ、夏はすゞしき木かげを尋ね、あだにすごしてそいといみじう悔しけれ。のち〳〵、世のすぎ行く、有樣を見るに、人、みあ、金錢を貴しとして、光陰の貴ときを知らざるが如し。金錢の貴とさは、失ふともふたゝび得がたきにあらず。光陰は、遂に、再、得ること能はず。惜みても惜むべきは、光陰にこそ。

肥後國菊池郡城北村　佐々有鄰子

地

山川のながれてはやき歳月をかへりみれば、木のめはる雨ふるかとおもへば、櫻花もちりはてゝ、卯の花の垣ねに郭公をちかへり啼き、早苗植る小田原に夕立の雲さはひ、水無月の大祓に、罪といふつみは川水の逝瀨きよく打はらい、桐葉の落る音もほのかに、秋のあはれをもよふしぬ。紅葉の錦おりかけし山は、みあ、木末さびしくありぬる

ものから、ふりさけみる峰には、まだらに雪ぞつもりぬる。實に、勤めいそしむ人の身にも、歳月は事業をかへりみずして、過去となりぬ。あな口をし。つたなき賤が身をいかにせん。

人

下谷區徒士町三丁目卅四番地　岡田柳子

げに、年月の、すぎゆくばかり、速なるはあらじ。あたらしき年を迎へ、はぎごといひかはしたるは、まだ、昨日けふとのみ思ふに、早、今年も終りとなりにけり。きのふといふ今日と暮してあすか流れて早き月日なりけりの歌さへ浮びいでられぬ。思へば、春霞棚びきわたる花の山をわけ上りしは、いつの日にかありけん。卯の花うつる河岸に涼みしは、いつの夜にかありけんと惜しまるゝも、珍らしからぬ事なりけり。今宵しもふと文机によりて綴きたりし文の中に、歳月人をまたずとありし事の、日頃忘りし身には、いとゞ、身にしみて、寸時も疎かにすぐし玉はざりし古人も、かくはうたひ給ひけんを。わはれ、妾、いつのよにか、一年の、定めし業を、なしをへてと、うたはるべき。この後よりは、例のくり言繰りかへすひまに、學びの道をつとめばや。年々にかゝる事作りをきし文の、早數多くなりぬるを。思へば〳〵、すぎゆきし日のみをしまるゝよと、只、我心の愚かなりしを打かこたれてなん

（以下原稿到着順）

福原菫子

花と移り月とうつりて、いかにせん、學びの道は未だ中途にも及ばざるに、一年に、早や殘りなく暮れはてんとす。嗚呼、落花枝に上らず流水もとにかへらざる如く、隙行く駒の足はやみ、行きて歸らぬ月日なることそかなしけれ。さるに年少き時は、兎角、今日暮るゝとも、尙、明日あるを恃み、明日こそはと、幾度も思ひ立たんとはすれど、さて、思ひたる許りにて、なすこともなく日をすぐし、終に、世に用なき不具者と成り果つるものなれば、いかでか、一寸の光陰をも、空しく過ぐして可なるべきや。實に、歳月は人を待たざるものなることぞひなけれ。あゝ。

御巫富士子

ひまゆく駒のあがきはやく、ことしも、冬のとしめとなりぬ。いつもながら、ことしは、かれも學びてん、これもと思ふ事のみしげくて、一つも、學び得しことなきに、いかでかくすぎぬらん。誠に、盛年は重ねて來らずなと云ひけんもことわりなりけり。まして、人生僅に、五十年といへるを、女の身は、裁ち縫ひの外、ことさら事しげく。學ふは、少しの間なれは、殊に心して、波風あらき世の海原を一生の梶をあやまらぬ樣、つかのまも惜しみてまなひつゝ、心の駒をはげまして、ひまゆく駒

におくれさらむことを、つとむべきなり

關　勝　子

歳月不待人と、うへなる哉。巳年の初に、是をなさはや、かれをなさばやと思ふ内に、む月立ち、きさらぎ過ぎて、いつしか、花にうかるゝや生の頃とは成りにたり。かくてはならずと、息をはげまして、ひもとき初し書の、未だ、なかばにもならなくに、あはれ、今年もも早暮むとすらむ。さりや。行く年月は、とゞめんとして止るべくもあらざれば、くゆともせんなかるべし。たゞ、今日よりはいそしみはげみて、來む年には、や生を待ずして、巳が心の花を咲すべく、思はるゝよ。

永　井　廣　子

歳月不待人とは、五柳先生の詩句より選びし言の葉ならん。また、光陰矢の如く歳月夢の如くなど、皆、年月をゆるかせにするを戒めたる箴言なり。そも、學びの窓に向ひ、文の林を分け入りつつ、そを守り得ぬ人々は、實に、口惜しきかぎりなん。されは、まづしき家に生れ、なりはひのすべにと、こゝろをくだく賤の身や、白浪のよるべなき身や、くさつゝみ病の淵に沈みつる人々には、いふも詮なし。いさゝかなりとも、いとまある身にしあらは、夢、怠らず、學の道を勵みてよ。しいて後悔る事なかれ。妾等は、一任に、身を斯道に委れんとこそ、なりはひのゆるされぬ業にしあれ。造次にも顛沛にも、こゝろ怠らず學びゆきたらんには、譬へ、たうなりとも、梓弓末の矢筈は岩をもとほさゞらめや。

阪　本　榮　子

今宵しも、いさゝかいとまをぬすみて、文机に向ひ、讀みさしの女鑑を繙き、見もてゆきしに、そが中に、歳月不待人といふ題あり。そも、この言の葉は、怠りがちなる人をいましめし、古人の金言にして、かりそめにも、學の窓に入たらむものは、幼き童子等も、皆、口にすめれど、云ふは易く行ふは難しとか、實に、このいましめを守る人の少きは、まことに、嘆はしき極みにこそ。あはれ、この語をよむにつけても、わが身の上をかへりみれば、何一つしいでし事もなく、只、徒らに過しゝ日のみ多くて、早くも人生の半を消しぬることのはづかしさよ。いで、今よりは、つかの間もあだに過さず、學の道をいそしみはげみて、遂には、女のかだはしにも、加はらばやと、いさゝか、心に浮びし節を、かくは、筆すさみぬ。

北　島　功　子

年をむかへしは、きのふとおもひなりしほどに、いとはやも、時計の針の絶間なくて、一時とすぎ、一日と暮れ行けば、はや、霜月の中ばとなりぬ。殘る日數は、をよび折りつゝかぞへんもたやすくなん。新しく年たちかへりしころには、今年こそ、此ひとことをもなしはてむ。彼の業をも終へてむと、大方は、胸によみつゝほさふろうちにも、月日は流るゝ水の如く、怠りの身は、心におもふ千重の一重も得なしはてず、いたづらにすぎ行くなる、重れかされぞ口惜しき。いとせめて、今はや、束の間をだに、月日のかげはとゞまれかしなど、今更に、仇なるこゝろたのめしつるも、小人の身のいと〳〵愚かしきや。實に、歳月は人を待たずとの戒めも、宜なりけるよ。人々心すへきことにこそ。

松　尾　せ　い　子

歳月不待人と古人の戒を、唯れも誦ずれど、さて、其の身を戒めて勉むる人のみなるか。他人の事はかにかくに、この語見るたびに、口惜しうおぼゆるは、たゞ〳〵しき我身の、往時になむ。あはれ、學の庭に通ひける時は、たゞ、いわけなき心に、將來の事などはからざりき。今、母君のふといたづき給ひて、世の中のしげきわづらひをさけ給へば、家事其の他よろづのわざは、

小女の務さなりぬ。さらぬだに乏り淺き身は、世のあら波に漂ふ小舟の、揖さへ定かならぬ心地して、惑ふ事のみ多かり。この年月、何さなく過ごしゝひまに、今ひさきはつさめはげみて、學の道をわきまへたらんには、今日の悔はあらざらましを。いで、今よりは、つかの間も、日かげ惜しみて、すぎにし怠りを償ふよすがさもなしなん。今こそ、此の金言をおのれは解したるならんか、

松本翠子

物の哀知られん人は、更にもいはず、心なき身にだに、物悲しかりける秋も、暮れなんさする此頃の夜中、燈火かすかなる文机の下に、今日學び得し業の、しくもなしはてゝ、あくれさ昔を忍ふ折しも、ふさ心に浮びたるは、幼かりし時、我を愛しみ給ひし師の君の、物せられし文にそありける。あゝ過し昔の忍ひ出るさて、繙き見つゝ行くに、歳月不待人云々の語あり。こゝに至りては、いにし昔のさまのみか、また來ん事までも想ひやられて、心なき虫の音までも、常よりは哀れにきこゆ、空高くなき渡る雁がねも、一しほ身にしみて、あはれさいはん方なし。げに、流れ行く年の瀬川は、聊のよさみなく、三させ四年は夢の中にて、なすこさもなき我身はかりは、幼きおもかけににもやらす、かくて、徒らに月日を送りなは、嗚呼老ひたりこれ誰の過そなさゝ、おのれを責むる時もやいたりなん。老ならす幼ならす、文學ふにはいさよき齢にしあれは、時計のはりの絶間なき如く勉めたらんには、かはかり此の語に心をうたれやせんさて、またも、明けなん日の下しらへにさりかゝりぬ。

涙の種子

在種子島　なにかし

敷島の火筒の種子赤尾木(アカオギ)に、數への職を命せられけれは、吾は、妻さ共に、故郷都洲(ミヤコシマ)を旅立ちて任地に赴きしは、忘れもならぬ、去年秋の末ッ方、秋風はだ寒き頃にてありき。妻は、初旅にもあれば、親はらからも假り染の別を惜みて、村外づれ迄見送れり。吾等は、氣も浮立ちて旅路に上り、車や船に打乗りて、其日鹿兒島にぞつきにける。旅宿に一二夜を明かし、やがて、滊船に打乗りて、山なす白波蹴破りて、知林御崎(チリンミサキ)は夢の間に沖の小島の種子島(タネガシマ)、赤尾木浦につきにけり。村人は、數ならぬ吾等にうさ〳〵しからず、いさも親切に交り吳れ、嬉しさの數々は、其都度故郷に申し送りて、垂乳根の心を慰め來しに、こさしの春の花の頃、思ひ掛けもなう父上大病の知らせ矢の如くなりければ、吾等は、いたく打驚き、取るものも取り敢ねず、船に車に夜を日につぎて、やがて吾家に歸り見れば、父上には病の床に横はりて、やせ衰へて、昔の面影も消ぬ失せん計なれども、はらからの看護や、治療の行き届けるにや、きのふよりけふは病も快き方に向へりさの父上の辭に、胃散にまして胸のつかへも下がり、しばしは嬉しさの涙にくれぬ。十數日もたちて、再、故郷を後ろに、薩摩潟沖の小島の旅客さはなれり。人も、吾等も、眞心より無事の歸島を悅び合ひ、近隣の親しみも、むかしにいやまして、今は、心落ち付きぬ。今の世に生ひ立たん撫子の敎の道に餘念なく、いさも樂しき月日を送り來しに、妻は、去月廿八日、産後のなやみにて病の床に伏し、枕再ひ起立たん樣も見ねず。吾はいたく打驚き、醫者よ藥よさ百方に心を碎き、看護に怠りなけれども、旅の身の、只獨

り、此大病人の傍にありては、虫の音の細き心の彌やまして、如何にせんすべもなければ、取り敢へず電報もて故郷なる母上を呼びまゐらすれば、母上には、さらばとて心も足も矢の如くに急ぎ旅路に上り給へども、折悪しく便船の途絶えて、さすがに、心を千々に砕き給へども、はても知れぬ荒ら波の上を、泳ぎ渡る術もなく、空しく手をこまぬきて、一日を千秋の思に、五日の永き間鹿兒島の船問屋のいぶせき一室に籠り給へる、心の中ぞ涙なる。あすか今日かと待ちわびし吾心のせつなさや。亦如何計りぞ。やがて、鹿兒島丸來港との知らせに驚き悦び、病人は、しばし下婢に托し置きて、急ぎ海岸に出迎ふれば、母上には、非常に船に醉ひ給ひ、やう〳〵に吾宿所につれまゐらすれば、妻はよろこびて、病氣も、先づはよき方なりとて、母上を慰め、笑ひ興じてありけり。吾は、今、母上を得て、百萬の援軍を得たる心地して、日毎夜毎に、更る〳〵傍にありて、看護に怠りなけれども、密かに醫師の辭を打聞けば、只驚くの外はなし。無念やるせなし。母上には、看護の中に物を案じられ、思はずホロリと一滴の涙をさへ落とし給へば、あはれ、妻はけふあすの命とも知らで、却て、母上を氣の毒がり、病癒へなば、鹿兒島はさて措き、故郷まで是非にも母上を送りまゐらせん。――母上には、今しも落させ給へるは、涙にはおはさずや。泣き給ふには及ばずなど、言ふ聲も、枯野の虫の細く行くが如くなれば、母上には、ソハ涙にはあらず、汗なりしとすぎらし、悲みを隱くし給ひしに、十月十五日と云ふは、ソモ如何なる惡運の妻が身につき纏ひ來りしぞ。母上着島後、僅かに五日の午後七時四十分と云ふに、可惜十九歳の弱齢を一期として、寐入るが如くに、空しく孤島一抹の煙と消えたるぞ悲歎痛恨の極みなれ。「イマシンダ」との悲電は、早や故郷に達せしならん。今頃は親はらからの歎き如何計りなるぞ。思へば、過ぎにし春の別こそ、終に歸らぬ旅の別れにやありつれ。嗚呼、死するものは歎けども甲斐なく、呼べども歸り來られねど、尚歎かれて悲しきは、孤島の秋の夕まぐれ。去るにても、村人のなさけ深き、彼是の世話至らぬ隈なく、野邊の送りも首尾よく成し濟しゝは、歎きの中の喜ぞかし。凡そ心に喜あるときは、萬つの物皆よろこびを添へ、心に悲あるときは、見るも聞くも皆なげきの媒となる。まして、旅の身のたより少き吾身には、うたゝねの夢にも、妹が生前の事新らしくも浮び出でゝ、一として、涙の種子ならぬはなきぞかし。

哀悼

吾れをのみ獨り殘して此夕
　かへらぬ旅を何急ぎけん

月花も共に涙の種子島
　いつまでこゝに物や思はん

殘し置く妹が形見のます鏡
　うち見るたびに袖ぬらしけり

呼へど〳〵答ふる聲もなき人は
　いかなる風や誘ひ行きけん

ありし世を忍び〳〵て寢もやらぬ
　夜半に嵐の吹き荒む哉

奥津きのあたりにすだく虫の音を
　きくも悲しき秋の夕くれ

去年の冬故郷に在る父の許より氣慰にとて菊苗をおくりこせしも今は却て悲の種子となりぬれは

さかりをは共に待ちにし白菊の
　手向の花となるぞ悲しき

我校長曾我氏妻君の果敢なくなり給ひしを悲みまいらせて

種子島西表　阿世知なか子
十二年十一月

數草花の色添ふ白露を
ちらすもれたし秋の山風
仝　羽生能安

飛鳥川けふはうき瀬に變るとも
しらて昨日の淵になれけん

岩橋のたへしちぎりの悲さの
涙そか〻るかつらきの山
仝　日高すか子

今よりは君か昔を思ひ出て〻
そてをぬらさぬ時ふからまし
仝　日高てつ子

かくならぬ君とはしらづ今よりの
後をたのみに思ひし物を
仝　羽生かめ子

君ますと思へはこそは朝夕の
よの營みも樂しかりしを
仝　西村詠山

うき旅にうきを重ねてなき人は
如何に悲しき門出なりけん
仝　尾形牛次

いか計悲しかるらんとゝまらて
旅より旅に別れ行くかは
仝　中田きよ子

薩摩潟おきの小島の朝露と
はかなく消へし君そ悲しき

かくまてに惜むも知らて消へ果てし
君はいつこに獨住むらん
仝　川口悌一

空をのみ風荒みなは松の枝は
つひに千歳も經なまし物を
仝　ふみ子

草枕むすひしたにもうき物を
歸らぬ旅そかなしかるらん
仝　肥後時宏

さらぬたに物うかるへき旅衣
かされ〳〵に袖しほるらん
仝　笹川竹友

きみかけふきるとし聞けは藤衣
きらぬ香さへかなしかりけり
仝　けい子

しら露の玉ときえ行く朝顔の
はなの盛りの惜しくもある哉
仝　猶原長周

歸り來ぬ君かきのふをなけく間に
秋さへ暮になりにける哉

あはれにも咲き社殘れ昨日まて
君かめてにし白菊花
仝　羽生能靜

旅にしてかなしかるらん妹とせの
終の別れにめくりあひつゝ
仝　上妻宗武

世にあらはかりのたよりも見んものを
まつに甲斐なき旅にもある哉

秋の庭

はかなくも玉と結ひし白露の
常なき風にちるそ悲しき
仝　牧胤一

獨り行く君か黄泉の悲しさに
たもとの時雨はれ間たになし
仝　濱田衆俊

をしとりのつかひはなれて行く水の
歸らぬ今日そ悲しかりける
仝　下村時知

草枕ともに結ひし女郎花
かれしと聞くそかなしかりける
仝　西村きさ子

しら菊のつほみも共に消て行く
露のすかたと聞くそ悲しき
仝　下村爲衛

人皆の惜むも知らて行く秋に
誘はれ果てし君そ悲しき
仝　八板釣翁

浮雲の定めなき世の常なから
はれぬや君か心なるらん
仝　大山時里

せめて世に形見の子たに殘し置かは
慰ましと君思ふらん
仝　美坐時治

産みの子かあはれ日くらし鳴く山を
賴みに入りし夕日なるらん
仝　上妻三郎

空蟬の世に悲しきはたひにして
かへらぬ人の別れけりけり
仝　八板あさ子

きのふかも語りあひしをさま〳〵に
思ひつとへてなけく今日哉
仝　平山寛

かへるへき故郷ならて心にも
あらぬよみちに何に急くらん
母君の御なけきを思ひやりて
仝　平山龜子

わか上に思ひさらへて子を思ふ
きみをあはれといはぬ日そなき
仝　西村あさ子

草も木も露けき秋に垂乳根の
そて如何計りぬれまさるらん
仝　柳田常儀

なき人をしたふと聞けはよ所なから
涙にぬるゝわか袖かな
仝　樋口衆則

今はとて梢はなるゝ紅葉より
はかなき君か行ゑかなしも
仝　高崎くま子

呉竹のすなをに立ちしまこゝろに
なさうきふしの積る君かな
仝　知覧かた子

哀れなり吹くこからしに誘はれて
しけれる松もかれぬと思へば

（未完）

産科婦人科 櫻井病院長 醫學士 櫻井郁次郎先生序文

婦人科小兒科女醫 吉田賢先生著 增補第三版

姙婦必讀 安産の心得

附 育兒法

本書は姙娠中の攝生●分娩の心得●産後の注意●育兒の方法等を詳述せり文章は平がな付婦女子に解しやすければ産婦の健康に注意し強健の子孫を得んと欲する人は男女を問はず必らず一讀せられよ

本書目次●姙娠●月經閉止●月經中の攝生●飲食物の嗜好●惡阻●精神の變常●乳房の變化●陰部の變化●胎動●心音●姙娠中の攝生●衣服●繃帶●腹部●頭髮●居室●運動●睡眠●精神の攝生●夫の義務●乳房の準備●清潔●大小便の通利●産婆を雇ふ時の心得●産室の用意●分娩●産湯の使ひ方●産褥中の心得●褥婦の臥床●飲食物●大小便通利●惡露●陰部の所置●身躰の攝生●精神の攝生●褥婦を訪問する心得●乳熱●褥婦の用事●授乳せざる時の乳房の所置

育兒法

●早産兒の狀態●臍帶脫落●初生兒の脉搏●初生兒の呼吸●初生兒の黄痘●赤兒の發育●精神の發達●衣服●頭巾●足袋●月代●赤兒の臥床●居室●宮詣●赤兒の啼くは如何●入浴●齒牙發生●小兒乳養の事●小兒に乳を授くる母親並に乳母の攝生法●授乳時の心得●初乳球の事●離乳の事●乳房の保護●母乳を與へざる塲合は中途にて斷乳すべき塲合●乳母の撰び方●人乳の成分●乳母の臥床●飲食物●乳母を雇ひたる母親の心得●人工營養法●過量の牛乳を與ふる害●練乳（ミルク）の成分●人造營養品並に用方●一年以上の小兒養育法●飲食物●副食物●嗜好物●口内清潔法●小兒に鼻呼吸を習はしむべき事●美容正しき位置を取るべき事●小兒の疾病並に養生法●健康なる小兒の狀態●麻米爛●小兒の便秘並に下痢●吐乳●鵞口瘡●鼻加答兒並に扁桃腺炎●眼の攝生法●耳の攝生法●小兒のおそはるゝ事●蛔蟲●跛●腺病●傴僂病●小兒傳染病●體溫器の用ひ方●小兒に藥劑の飲ませ方●牛乳貯蓄法並に授乳器の扱ひ方

洋裝美本全一册送料共金四拾四錢爲替又は切手代用一割增

發行所 東京市赤阪區田町三丁目角 保成堂

賣捌 神田東京堂◎丸善書店 大倉書店◎大阪丸善支店

既刊

少年奇書第四編迄既刊

少年世界記者 巖谷小波序

少國民記者 竹內紅蓮編

尾竹竹坡 尾竹國觀畫

小哲學 一名 笑林

定價金八錢 郵稅貳錢

無邪氣にして面白をかしく輕妙にして罪なき滑稽口話六十有餘篇を集めたり口繪には天下の佳景八頁を以てし附錄には滑稽短篇小說『讃岐の手洗ひ鬼』を以てしたり一點の猥褻をも交へざるは此書の特色なり

北隆館出版部 東京京橋區銀座町十四番地

大賣捌 東京堂、東海堂、盛文館、上田屋、其他

作文叢書全部拾貳冊

電話新橋一七八九番

營利的賣藥にあらず

肺病患者に急告す

一大發明肺治散

私儀明治廿一年の十一月以來慢性肺病に罹り千葉縣下の醫藥は勿論妙藥なりと聞く毎に諸種の賣藥服し東京市内有名大家諸先生の診斷服藥し猶ほ横東獨逸病院長(ドクトル)の藥劑も其効なし豆州熱海相州箱根上州草津温泉何れも兩三年入浴するも異狀なく其外鍼灸限なく療養したるも効驗更になく漸次重症となり廿八年四月頃には時々咯血して皮膚青白く身體非常に衰弱し日々發熱し咳痰甚しく骸骨同樣に成り最早此上は致し方無之く只死を待の外なし然るに私は病中臥蓐の内と雖ども常に書見するの癖あり一日家藏の古書を點見する中文政の頃大阪の名醫長崎に遊學し蘭人より授りたる肺病必治の奇法聞書と云ふを發見し試みに數包を調劑して服せしに不思議にも疾快を覺へ尚續て服するに徐々快方に赴き四週間餘りにて全く根治したり既に死に望みたる大患を斯くも容易く根治し實に蘇生したる思ひにて此の嬉さの餘り爾來肺病患者と聞く毎に其實を告げ試藥せしもの五十四人皆共に全治せざる者なし眞に驚く可き世界唯一の肺病奇藥なるを以て爲め之を世に公にして數萬の肺病患者を救護せよとの勸めを受るに至り遂に肺治散と名づけ内務省の御檢査を經り弘く世の肺病患者に發賣する事となれり然るに本劑の効驗非凡なるを以て發賣以來日尚ほ淺きにも不拘内地は勿論既に**米國紐育市タイヤーガ商會及び印度バダビヤヒイアエーテス社**等へ續々輸出す專ら高評を博し服用諸君よりは全治の禮狀實に三千五百餘に達せり然るに此奇藥を知らず種々に迷ひ病苦に惱める人士なきにもあらずと天壽を全ふせんと欲せば速に本劑を服して難病根治の一大幸福を得よ



藥價 七日分一圓五十錢 ○二十一日分四圓 ○三十五日分六圓五十錢 ○遞送料十二錢 ○爲替局名は安房國千倉局宛取組の事

主治 ○肺結核 ○肺炎 ○氣管支加答兒 ○肋膜炎 ○肺尖加答兒 ○たん咳等肺病胃病より起る諸症を根治する偉効あり

効能 用法及び詳細は本能書にあり(但し本舖へ直接御注文の時は病狀の模樣を詳細に記入御申越を乞ふ)

千葉縣安房郡曦村千倉千三百四十一番地

調劑本舖 川名助次郎

大阪特約店 大阪市心齋橋筋二丁目 **丹平商會**

東京一手特約店 東京市神田區花房町二番地 **山崎帝國堂**

仙臺大取次 仙臺市新傳馬町 **櫻井伊之助**

横濱一手特約店 横濱市吉田町二丁目都橋際 **永井永進堂**

山梨大取次 甲府市相生町五十四番地 **矢崎房次郎**

大阪特約店 大阪市道修町三丁目 **賣藥株式會社** 卸賣

肺治散特約店

長野縣信濃國上田原町山崎山林堂○愛知縣三河國豊橋吳服町中村丈三○長野縣長野市大門町小林傳兵衛○靜岡縣小笠郡南山村高橋英進堂松本德太郎○秋田縣羽後國北秋田郡下大野村奈良源五郎○群馬縣上野國前橋市桑町馬場常七○靜岡縣靜岡市梅屋町森文吉○栃木縣下野國宇都宮市通り馬場町藤井愛生堂○福島縣福島市大町石井松五郎○上野國高崎九藏町小澤宇平○岩代國郡山町根本祐太郎○長野縣信濃國上諏訪清水町河西善七○山形縣山形市旅籠町字一卜町六合舘前島○大阪府東成郡平野郷町西脇上谷庫藏○大阪心齋橋筋博勞町高橋盛大堂○大阪堺筋伏見町谷回春堂○大阪市淡路町日野合名會社○愛知縣名古屋市本町四丁目土屋怨兵衛(全國到る所の有名なる藥舖にて販賣せり萬一無之地は本舖へ申越次第特約す)

女鑑

明治三十三年十二月五日發行　毎月二回五日廿日發行　明治廿五年三月十二日
第貳百拾八號　第三種郵便物認可

東京市京橋區築地貳丁目株式會社[illegible]印刷部印刷